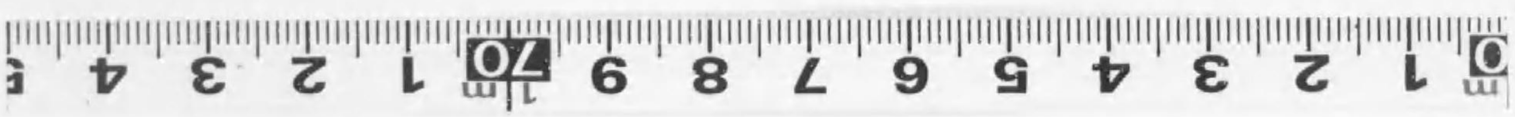
529
174



日本民謠の研究

高野辰之 著

春秋社

大正
13.12.19
内交

序

本年の夏、北海道の釧路市から、民謡に就いて十時間ばかり講演してくれと申越されて引受けた。ついで野付牛町からも同様の申込を受けた。さていよ〳〵約束の期が迫つて來ると、釧路からは「民謡と國民性」と題して廣告してあるといつて來、野付牛からは「日本民謡史」と題してあるといつて來た。どちらでもいゝやうなものだが、兩者の間には範圍の廣狹と、時順を追ふの必要があると無いとの別があるので、大きにまごついたのであつた。そこで大急ぎで案を立て直したのがこれで、兩者の希望にそふやうに工夫した積りである。もつとも多年補正を加へてゐる日本歌謡史の草案があるので、それから抄錄して此の小冊子を作つたのであつて、大急ぎといふ語の下

に、不備な點をいひくろめようなどといふ、ずるい考は少しも抱いて居らぬ。もと〳〵「民謡と世相」と題して述べる積であつたので、それをも一章に立て、國民性の發露といふ章と並立させて、時順を追つて說くことにした。えらさうにいへば「民謡に基く史的考察」といふのが一番內容に合するであらうが、それも仰山なので、「日本民謡の研究」と題することにした。

別段どの書から暗示を受けたといふこともない。自然一切を自分で背負はなければならぬ。但國民性に關しては芳賀博士の國民性十論に、經濟情態の推移に關しては本庄榮治郎博士の、日本社會史に啓發された處が多く、其の旨意の下に筆を執つた處には感謝の意を表しながら、一々それを斷つて儀禮を失はないやうに注意した。

釧路でも野付牛でも、講演の二日目あたりから、近いうちに是非出

版してはどうかといふ話が出た。私が早口で筆記しにくい爲ばかりでも無く、もつと世に弘めたらよからうといふ有難い趣意に解せられたので、增補と訂正とを施してこゝに之を刊行することにしたのである。

大正十三年十一月一日

斑山　高野辰之しるす

目次

一　緒說……二
民謠の意義……歌謠の形……歌謠の類別……技巧歌と民謠……民謠の流布と變化……民謠の內容……民謠の表現……客觀詩包含

二　民謠記載の乏少……一五
記紀の所載……萬葉集と民謠……催馬樂……神樂歌……風俗……雜藝……閑吟集……近代國民詩形の發露……江戸時代の記載……現代民謠の蒐集

三　民謠と國民性の發露……二七
我が國民性……國民性と民謠……愛に關する民謠の變遷……東歌……夫婦關係の歌……銑錬された歌……近代の愛の歌……愛み弄んだ歌
忠君思想……祖先崇拜……現實的……農業本位民と宗教心……宗教心の空乏……自然物愛賞
好笑性……神樂の早歌……近代民謠の滑稽味……言語上の戲

129-174

日本民謡の研究

——民謡に基づく史的考察——

高野辰之著

四　民謡と世相……七一
世相の意義……背欺と怨嗟……乞食者の歌……貴族の無謀驅刺……世襲の弊……大官の専勢……元老罵倒……地方政治の頽廢……土地兼併の弊……武士の擡頭……賭博の流行……生活の不安定……封建制の發現……武家時代の庶民……勞働の嫌忌
習俗の反映……中古時代の反映……歸化人との關接……遊女の遨在……流行の服飾……海老すくひ踊と阿呆陀羅經……女の婚期……閑吟集と習俗
江戸時代の民謡と世態……寛永期……元禄期……江戸文化潤熟期……黒船渡來
五　結語……三八
明治以降の思想界……明治の流行歌……民謡一變時代

一　敍　說

民謠の意義　民謠といふ熟字は支那の六朝頃からあるが、我等が近年使用するのは、これから出たのではなく、恐らく獨逸語の Das Volkslied（國民謠）あたりに導かれて出來た語であらう。從來わが國では、歌に目で見るのを主とする和歌と、口で謠ふのを主とする追分節の歌や田植歌や盆踊歌や箏歌や江戸長唄のやうなものと二種あつた。さうして此の後者に對しては、これに俚謠又は俗謠といふ名をつけてゐた。民謠は全くこれと同意義の語であるが、俚謠といひ、巷歌といひ、又は俗謠といふよりも、何となく、民衆の謠（うた）、貴族に對する庶民の謠、野の聲、自然の叫び、鄕土藝術といつたやうな近代人の口にする語に近接してゐるので、喜んで用ひられたのであらうと思ふ。

歌謠の詩形　「自分は從來曲節（ふし）をつけて謠ふ歌すべてを歌謠と名づけて來た。」此所にも其の稱呼を用ひることを許し貰ふことにする。

歌謠は元來敍情詩に屬するのであるが、わが國には小督局や小野小町や松風村雨・玉藻前といふやうな女、新しい處では高尾・夕霧・小春・八百屋お七、また男では浦島太郎・業平・義經・曾我兄弟・名古屋山三・椀久・紙屋治兵衛・飛脚屋忠兵衛・山名屋時次郎といつたやうな說話の上の人や實在の人の事蹟を綴つた敍事詩もあつて、之を歌謠の中から除外することは出來ない。然るに此の敍事詩は民謠の中にだけは存してゐない。總じて民謠なるものは敍情詩に屬し、人の心に涌いた情を單純率直に表現したものが多いのである。

「歌謠は曲節に合せて謠ふ便宜の上から、大凡定型があつて、句の數や音の數に制限のあるのが普通である。敍事詩風なものは長篇で、それ等は七五調を基本として、それに七七や五七の句を加へて綴つてあるのが先づ常體である。さうして此等は歌が前に出來て、曲は後で附けるのが例であるが、」民謠は庶民の聲であるだけに、ごく短篇で、眞に新しいものにあつては、歌と曲との間に時の前後がなく、全く同一時に生れ出るのである。短篇であるだけに、歌と曲との關係が緊密で、勝手に歌の音數を增減することは許されない。」たとへばドイツ節の歌、

かはい・ものだよ　なく音を・とめて　來たを・知らせる　くつわむし。

の如きも七七七五の四句より出來てゐるやうに思はれてゐるが、細分すれば前記の如くで、此の三四と四三が一つ入れ替つても、ドドイツ節では謠へなくなつてしまふのである。但其の間に多少の弛みがあつて、三四が四四になる位は謠ひ得られないのではない。例へば

どどいつは・下手でも　やりくりや・上手　けさも・七つやで　ほめられた。

でも、やはり謠ふことが出來て、多少の伸縮は許されてゐる。もつと例を擧げれば、十二三年前に流行つたナンテマガインデセウ節にしても

いやだいやだよ　ハイカラさんはいやだ。頭の眞中に　榮螺のつぼやき　ナンテマガインデセウ。

思ひは遂げたが　此の投島田　丸く結ふのは　わしや恥かしい　ナンテマガインデセウ。

と、七(八)八八八の形で、細分すれば三四(四四)五三・四四・四四が基本らしく、これに多少の伸縮が許されて種々の歌が謠はれた。又日露戰爭當時のラツパ節にしても

倒れし兵士を抱き起し　耳に口あて名を問へば

につこと笑うて目に涙　萬歲唱ふも口の中

トコトツトツト」

ダイヤモンドにだまされて　乘つちやならない玉の輿

人は名譽が第一よ　富貴は夢か浮雲か

トコトツトツト」

と七五の句四つより成つて、此の上にもいくらか伸縮は許されてゐた。こんな局限の下に綴られる詩を律語といふ。民謠は全國各地について調査したら二三の除外例は出るであらうが、總じては律語である。

歌謠の類別　歌謠全部に關しては、之を內容の上から類別して、宗教的歌謠と世俗的歌謠とに分けるのが最も便利で、神佛に對する讃歎や祈願や乃至懺悔の情を述べたもの、世にいふ御和讃の類は前者に屬し、此の世に處した得た感想を詠じたものは後者に屬せしむべきである。隨つて其の後者の內容なるものは種々多樣であるが、最も多いのは、愛の滿足、愛の懊惱をうたつた戀愛の歌である。これに次いでは田植・草取・茶摘・臼挽・石曳・木遣・機織等の勞働作業を爲すに際して謠ふ處の勞作の歌で、彼の馬子唄や獵師唄の如きも亦此の

類に入れて考ふべきである。これに次いでは盆踊歌や獅子舞の如き舞踊の歌も多く、君の御代を萬歳と壽ぎ、主人と崇める人の全盛榮花を讃歎する祝賀の意、友愛の情、羈旅の思、離別・哀悼・追懐等の念を謠ふ社交上の歌もあり、四季の風物に對する感興を述べた、自然物の歌とでも名づけたい歌も少しはある。彼の子守歌や童謠の類も亦此の世俗的といふ中に當然編入せらるべきである。

技巧歌と民謠　歌謠全部を其の成立上から類別しては、何の某なるものが或一定の目的の下に、例へば箏歌に用ひしめる爲に、又は江戸長唄の曲を附してこれに踊をつけさせる爲に作つたもの、或は某の事件、某の時に於ける感想を表して、最も人に強い刺戟を與へるやうにと心を用ひて、技巧的に作り上げたやうな歌と、又何時何處で誰が作り出したのか分らないが、兎も角傳唱されてゐる歌との二つに分つべきで、此の後者は實に民衆の聲で、其の聲は民衆の共産と目すべく、詰る處民衆の有する天與の作詩氣分が生み出したものと見るべきである。民謠とはこれの謂であつて、技巧歌と對立する處のものである。

民謠の流布と變化　民謠は其の作り出された時に記錄されるものでなく、口から口へ謠ひ移されて、此所から彼所へと次第々々に擴がるものである。さうして其の際にいくらかづつ變じて行つて、短く縮められることもあれば、長く作り添へられることもある。又其の曲節迄も變化せしめられて、果ては別種のものかと思はせられることもある。これは技巧歌の上にも行はれることで、かの九連環から脱化したカンカンノー踊の歌が、其の好適例である。

カンカンノー。キウノレス。キウハキウレンレン。キウハキウレンス。キウレンス。サンショナラヱ。サアイホー。ニイクワンサン。インビンタイタイ。ヤアアンロ。メンコガコカクテ。シイクワンサン。モヱモンゾハヱ。ビイホービイホー。

などと記してある。元來は

看々兮（カンカンエー）。賜奴的（スヌデキウレンクワン）九連環（キウヤキウレンクワン）。雙手拿來解（ショワンシウナライヤイボーキヤイ）　不解（ナバタル）。拿把刀兒割（クロイクワイボードワンリトウエー）。割不斷了也（エースー）。

が原曲の詞で、これに多少の語を添加した上に、訛誤が甚だしくて不可解の詞章となつてしまつたのである。凡そ享和文化年中に輸入して、長崎から弘まつたのであるが、忽ち三都に行はれ、見世物小屋のあたりでは唐人踊と題して勝手な振を加へて演ずるに至つた。

さうして文政十二年の江戸の大火には、

神田の。急火です。半鐘なるべ。西風。逃げさんせ。一家大概燒けたんべ。面工が惡くて心配さ。もえようとは。火灰々。

といふ替歌も出來、名古屋あたりでは飴賣がカンカンノー踊の歌を謠つたといふ。此等物賣によつて各地に紹介されたのでもあらうか、地方によつては之を山車の囃子に用ひた處もある。それが明治の二十四五年以後にホーカイ節となつて再生して、

一日も早く年明け主のそば。縞の着物に繻子の帶。ホーカイ。似合ひますかえこちの人、素人じみたぢやないかいな。ササホーカイ。

と謠はれた。ホーカイは不解の保存されたものである。さて明治三十年頃に起つたサノサ節も慥に同系のもので、

人は武士、氣慨は高山彦九郎。京の三條の橋の上、遙に皇居をネ伏拜み、落つる涙は加茂の水。サノサ。

の如く歌の構造が酷似して居る上に、曲の構造も亦同一骨格に成るのである。これなどは外來歌曲が吾が國民の嗜好に合して歡迎せられ、更に日本化され、更に更に時代化されて

行はれた一種の流行歌で、半は技巧歌、半は民謠といふ扱にしてもよささうな物に屬するので、特に之を例に採つたのである。

民謠は其の曲節よりも、其の歌詞の方がひどく地方化される。近來の流行語でいへば鄕土化されるものである。かの追分節なるものは、其の名の如くどうしても馬子歌で、道の分れとで謠つたのが起りでなければならぬ。それが步調の律動によく合するばかりでなく、艫や梶を操る動作にもよく適する曲節であつたが爲に、舟子の唄にも用ひられて、日本本土の北海岸から北海道地方にかけてよく流布した。其の發生地は不明だが、一名をこむろ節といひ、それが德川の初世から用ひられた名であるによつて、信濃の淺間の裾野小諸あたりで起つたのであらうといふ人もある。實際此の處に追分と呼ぶ小驛があるので、强ちに否認は出來さうもない。原歌は

西は追分　東は關所　せめて關所の　茶屋迄も。

か又は之に近いものであらうと思ふが、それが伊勢路地方に傳播しては、

坂はてる〳〵　鈴鹿は曇る　間の土山　雨が降る。

と謠はれ、北越地方では、

來いとゆたとて　行かりよか佐渡へ　佐渡は四十九里　波の上。

と其の地方人の共鳴をひき起し得るやうに替歌が作り出された。又北海道に入つては、

忍路高島　及びもないが　せめて歌棄　磯谷まで。

と改められた。彼の母音を長めて哀婉凄愴な調べの下に、人をして袖を絞らしめなければ止むまいとする曲節も、亦到る處の人々の風尙に適するやうに、少しづつ改められたことは、馬子節・越後ぶし・北海道ぶしと區分されてゐるのでもわかるであらう。

追分節は早くから都會人にも好まれて、これに二上り新內を取入れて、

鳥も通はぬ八丈が島へ　新內「やらるゝ此の身は厭はねど、あとに殘りし妻や子は」

マアどうして月日を送るやら。

などとも弄ばれた。それが三味線に合せて宴席に謠はれるやうになつては、二上りの調は本調子になつて、いよ〳〵技巧的なものに改造された。これはひとり追分節のみに止まらず、潮來節でもお座敷物はひどく技巧化されたむづかしいものである。すべて民謠が座敷唄となる時には、最早生氣が失はれて、眞純率直といふ野趣の失はれることは、田舍娘が東京へ嫁入りをすれば忽ち調子のいい併し底力の缺けてゐる都女に化してしまふと同一である。けれども此の都會化された曲節が一種の流行となつて地方に傳播し、遂には原生地迄も風靡することも無いとは限らない。追分節などは此の道程に立つてゐるやうに思ふ。

民謠の內容　一般民衆の生活のそれの如く甚だ多種多樣で、同時に世相はよく此の上に反映するのである。細言すれば、世俗的歌謠に屬するものが多くて、戀愛の歌、勞作の歌、社交の歌の一切が存在するのである。又諸外國には宗教上の信仰を謠つたものも多く存するといふが、我が國の民謠にはそれが極めて尠く、却つて、教を說く僧を罵つて、

國分寺で踊れば　お能化めが叱る　お能化めが　天窓を。（吉左右踊の歌）

と、頭をなぐりたいといひ、敎祖の釋迦をさへ

お釋迦さんさへ　ばくちに負けて　四月八日にや　丸裸。

と茶化してしまつてゐる。

民謠の表現　極めて通俗な語で、きはめて卑近に述べるのが普通である。

蒸氣や出て行く　煙は殘る　殘る煙は　しやくの種。

君に別れて　松原行けば　松の露やら　涙やら。

などの如く句の斷續も明瞭なら、之に附けてある曲節も概ね平易で、輕快で、其の時代人の情緒を痛切に動かし得べく、總てが面倒臭くないのが例で、民謠なるものは飽く迄も自然の聲なのである。

これに反して技巧歌なるものは、民衆の中でも相當に教育ある人によつて作られるので、兎角故事說話の類を詩材として、其のいひまはしを古風にしがちで、長篇になる場合が多く、其の意味がやゝもすれば澁晦に陷る。曲節も亦複雜で、纖細で、時に重厚濃艶で、短時日の修養では模倣し得られないものが多い。彼の歌澤節などは其の好適例といふべく、追分節や潮來節や近來行はれる安來節(やすぎぶし)などにしても、座敷で謠はれる所の技巧化されたものは、中々素養のない者では眞似もし難いのである。技巧歌は其の名の如く飽く迄も作り歌である。

客觀詩包含　前に民謠は敍情詩であるべきだといつたが、時にはさう狹く限らず、純客觀詩たる敍景詩をも含めて考へなければならぬ。

高い山から　谷底見れば　おまんかはいや　布晒す。

は主觀詩で、敍情詩であるが、これと同型の

高い山から　谷底見れば　瓜や茄子の　花盛り。

は敍景詩と呼ぶべき客觀詩である。自然を賞愛するわが國民は此の類の詩を多く詠出してゐるので、客觀詩だといふので、之を歌謠と見ず、又民謠と認めないといふわけにはいかないのである。けれども純粹の敍景だけでは、人に十分の滿足を與へ難く、これに作者の主觀が混入して、敍情味が加はれば、所謂情景一致で、急に潤ひが出るのである。このことは

白鷺が　舟のへさきに　巢をかけて　波にゆられて　しやんと立つ(下野國古盆踊歌)

の歌と

白鷺が　小首傾け　片足あげて　やつれ姿の　水鏡。

とを比較すれば、直に氷解し得るであらう。勿論此の後者の如き情味裕かなものが、何時に於ても歡迎されるのであれば、以下例に引く歌には、自然此の後者の類が多い。

附けていふ、近來民謠の作り方といふやうな著書がぼつ〳〵出てゐるが、其の書にい

ふ民謡は、多く新しい意味に用ひたもので、民謡風の表現に模して作る技巧歌のことである。野口雨情氏の如きは明かに藝術的の民謡を創作しなければならぬと唱道して居られる。さうして彼の素盞嗚尊の八雲立つの歌も上古の民謡の一つと見て差支ないとして居られ、流行歌や俗歌は藝術でないから民謡ではない。民謡は飽く迄藝術であることを忘れてはならぬといひ、又民謡は同じ戀を謡つても、決して卑猥に流れない。何となれば民謡は詩だ。詩は言葉の音楽だから、決して卑俗は許さないと、其の著「民謡と童謡の作りやう」の中に極言して居られる。

これは同氏が民謡といふ語に右の如き意味をもり込んで說かれたのである。私の民謡といふのは前述の如くで、流行唄や俗歌が寧ろ本體をなすのである。さうして技巧歌とは反對の地位に立つて、其の想に卑猥のものあると否とには何の關係もないのである。

二　民謡記載の乏少

記紀の所載　民衆の聲たる民謡は上古以來王朝時代武家時代の二千年を通じて、上流貴族社會と交渉のあるものでなければ記載されなかつた。皇室を中心にして國家の大事だけを記載した古事記や日本書紀に民謡の多數が載せられよう筈はない。天皇は民を大御寶と稱へられて、仁慈を以て統治されたが、天皇と天皇の朝廷に立つ人々の行動だけを記載した史書には、殘念ながら民謡の如きは度外視されてゐた。日本書紀に時人の謡と稱し又は童謡となして十數首收められてゐるのを、せめてもの慰めとしなければならぬ。固より皇室や權臣の行動に關しての感想を、時の人即ち民衆が、誰がいつたともなく謡ひ出して、それが世に擴がり、後に傳はりしたのである。二三の例を擧げて見よう。

古い處では崇神紀に孝靈天皇の皇女の御墓を造る時に、時の人の歌といふが一首あり、又出雲臣の遠祖、出雲古根が、弟の飯入根が神寶を朝廷に献上したのを忿り、水泳に誘つて、弟の太刀を木刀にすりかへて置いて擊ち殺したので、

八雲立つ　出雲臭師が　佩ける太刀　黒葛多巻き　さ身なしにあはれ。

と時の人が弟に同情して謠つたとある。黒葛さは巻きは、如何にも嚴めしく見えたが、中身が本物でなかつた爲に、とう〳〵擊殺されてしまつたといふ意である。古事記には之を日本武尊が出雲建を誅せられた時の事として記してあり、橘守部は此の歌を解して、成程出雲臭師の太刀だけあつて、造りも嚴めしく中身にも錆がない、あつばれ業物だと尊が褒められたのだと說いてゐる（稜威言別）舊說に囚はれない解で、極めて面白さうである。

降つては舒明紀に、境部毛津が蘇我蝦夷の毒手を恐れて、畝傍山へ逃げ込んだが、隱れ場がなくて自殺した時、世の人たちが、

畝傍山　木立薄けど　頼みかも　毛津の壯子が　隱らせりけむ。

と謠つたとある。畝傍山は固より小さい山で、今もさう蒼鬱としてゐないが、上代も木立はまばらであつたものと見える。それを頼みにはしがたいが、毛津は年若なので、其處へ逃げ込んだのであらうの意で、前の歌と共に弱者に同情した歌である。後代義經を最負にし、曾我兄弟に同情する國民性情は夙くこゝに發露してゐる。又彼の皇極紀に載せてある、

岩の上に　小猿米やく　米だにも　手搖て行去らせ　山羊の老翁。

も童謠としてあるが、民謠として考へてよささうに思ふ。蘇我入鹿が聖德太子の御子山背王を廢して古人大兄を立てて天皇としようとした時に、誰人かが警告の意で謠つて、それが擴がり且つ遺つたものである。小猿は入鹿、山羊の老翁は山背王のことで、王の頭の毛が班雜けて山羊に似てゐたからであつたといふ。米には子妻の意もこもつてゐるのである。

日本書紀中民謠と認むべき歌の多いのは皇極・天智の二朝で、いろ〳〵込入つた事件もあり、且つ時代が新しかつただけによく記憶されてゐて採錄されたのであらう。何れも山背王等が入鹿に害せられた時とか、中大兄が鎌足と圖つて入鹿を殺さうとする時とか、慘事として考ふべき時のばかりが錄せられて、明るいものとしては唯一首

橘は　已が枝々　なれれども　玉に貫く時　同じ緒に貫く。

が見えてゐる。これは天智天皇が歸化した韓人五十餘人に官を授けられた時に、一視同仁の皇德を謳歌したもので、何となく大正の現代に對する規箴としても考へられさうな民の聲であつたのである。

記紀時代は如何に短縮して考へても、千年近くの長期間である。此の間を通じて民謠扱にすべきは僅に十四五首より他にはないのである。それも記紀編成の時代に近い頃のもの

に限られてゐるのである。之を見ても、民謡なるものは、貴族全盛時代には如何に輕視されてゐたかを知るべきである。民衆の聲、庶民の叫が國の上下に徹するやうになつたのは全く近代に入つてからである。

萬葉集と民謡　記紀時代の次は所謂奈良朝時代である。亞細亞大陸の文化が全く我が國を支配した時代で、天皇と廷臣と僧侶との時代で、一般民衆は租（田地に課せられた稅）調（諸國の方物を定規によつて政府に納めさせられるもの）庸（正丁に課せられた夫役の代りに出させられる布米等）を納めさせられるだけのもので、一國の政治には何等參與するものでなかつた。こんな時代にはやはり民謡がさう記載される筈はない。所が當代に成つた大歌集、世界の古文壇に於ける大作として萬國に誇るべき萬葉集が大伴家持の手に編輯せられて、此の書の中に物貢の歌や關東地方の民謡や越前あたりの杣の歌、九州地方の漁夫の歌、合せて何百首かを採錄してある。さうしてそれは我等が當代民衆の生活を知るべき資料としては、後の敕撰和歌集に比して幾十倍かの價を有するのである。

催馬樂歌　次はすなはち平安朝時代で、いはゞ藤原氏の專權時代で、其の末年には武

士が漸く頭を擡げたが、農工商の三民は勿論政權に觸れることは出來なかつた。すなはち廷臣と僧侶と武士との時代であつた。假名文字の完成は和歌・物語・隨筆・紀行・日記・雜史等に驚くべき大作を產出せしめたが、文權は同じく貴族の手中にあつたので、まだ〳〵民謡が書留めらるべき筈ではなかつた。所が上古以來のわが音樂藝術は甚だ低級なものであつて、天武天皇の朝から當代の初頭にかけて、盛んに大陸の舞曲が輸入せられたことは、今日の洋樂の輸入以上であつた。然るに此の曲には歌が附隨して居らなかつた。いや元來は附隨してゐたものもあつたのであるが、彼我の言語の相違は其の歌迄は輸入しかねたものらしい。さうして暫くは其の曲だけを歎賞し模倣してゐたが、後にはこれに歌のないことが淋しく感ぜられて、當時の民謡を取つて來て之に合せて謡ふことになつた。これが卽ち催馬樂歌である。馬子歌といふ意で、俚謡といひ巷歌といふと同樣なのである。外來樂曲を謡歌するものはいふ迄もなく當代の貴族であつた。それが何故に和歌を謡ひ物に用ひなかつたかは當然起るべき處の疑問だが、和歌は當時固定した形式の下に詠み出されて、全く目で見る處のものと化してゐたのである。さうして外來曲に合せしむるには、

山城の　狛のわたりの　瓜作り　ナヨヤ　ライシナヤ　サイシナヤ

瓜作り　瓜作り　ハレ　（一段）

瓜作り　われをほしといふ　如何にせん　ナヨヤ　ライシナヤ　サイシナヤ。

如何にせん　如何にせん　ハレ　（二段）

如何にせん　なりやしぬらし　瓜破つまでに　ヤ　ライシナヤ　サイシナヤ。

瓜破つま　瓜破つ迄に　（三段）

の如き奇異な反復と囃子詞を加へる必要があつたのである。此の歌は當代俚謠の一體で、

山城の　狛のわたりの　瓜作り　われをほしといふ　いかにせん　なりやしぬらし

瓜破つ迄に。

所謂短歌の第三の句と第四の句との間に七五の句が挿入されたものである。目で見る和歌、歌合に巧拙を評し合ふを能事とする和歌は、ます〳〵其の形も詩材も固定する間に、俚謠は古く遠くは同じ源から流れ出でながらも、さう人爲の堤防にせかれず、思ふが儘に廣野を流れ流れた。さうして所在の水を合せて巨流となり、分れて幾條の流れとなつて思ひ〳〵に巨浪細波を立てて進んだのであつた。其の形、其の想、其の表現、一切は民衆の認否如何によつて攘まりもすれば廢れもした。さうしてこれだけは政府や貴族の支配以外

に立つものであつたのである。固定した融通の利かぬ和歌よりは、此の生氣ある民謠の方が、貴族連の耳にも面白く、淫蕩生活に日を送る貴族連には一般民衆が大膽に告白した愛の歌の方が、虛飾と假設の上に立つ和歌の戀歌よりも遙かに面白く感ぜられて、遂にこんな民謠が貴紳連の遊宴歌舞場裡へ參入することとなつたのである。

神樂歌　神事に對しては一方に嚴肅莊重を極め、一方に開放と自由との許されることは天の岩戸開きより此の方の習はしで、當代に於ても朝廷の御神樂の時には、採物の歌といふ神への供へ物を詠じた歌を謠つて舞つた後に、大前張小前張といふ二つの部類に分たれた數十首の歌が奏せられた。これが概ね民謠で、白晝親や兄弟の前ではとても謠はれさうもない歌に富むのである。

風俗　以上の他に風俗といふ謠ひ物があつた。これも東國地方の民謠である。京都住居の貴紳連は、其の鄙びてゐる處が面白くて、好奇心に驅られて謠つたものらしい。更に說くべきは、

雜藝　の歌である。世に今樣歌と稱するものは、此の雜藝の一部をなすもので、雜藝歌の中には神社に關する神歌もあれば、佛の敎に關する佛歌もあつて、此の神佛歌の中に

民謡が甚だ多く含有されてゐた。さうして

我は思ひ人は退けひく是やこの波高荒磯の鰒の貝の片思ひなる。」

百日百夜は獨り寢ぬとも　人の夜妻はイナ實正にほしからず。

宵より夜中迄はよけれども　曉雞啼けば床さびし。」

の類は極めて穩かなもので、他にいくらも當代の世相を卜知するに足るものがあるのである。

閑吟集　鎌倉室町兩幕府時代は全く武家の時代、僧侶の時代であつた。貴族は官位ばかりが高くて、實權を有つてゐないことに至つては、庶民と擇ぶ處がなかつた。さうして貴族連は崇古主義の下に民謡を省みることはなく、庶民には文字の力がなかつたので、無數に謡ひ出された民謡も、遂に書き留められず、纔に室町時代の末に近くなつて、閑吟集といふ書の中に百首許りが採錄された。他には能や狂言の中に作りこまれて數十首遺存するだけである。

近代國民詩形の發露　義殘後覺といふ書によれば、矢部善七郎といふ信長の家來は安土問答の奉行を勤めた程の男であつたが、平素竹釘を削り、家來どもにも削らせて賣つたので、京童が

矢部の善七　大名にならば　竹の二俣　世は不思議。

と謳つたといふことである。又二川隨筆〔細川宗春著　山川素石補〕には、信長の名臣四人を評して、世間で

木綿藤吉　米五郎左衛門　かくれ柴田に　のけ佐久間。

と謡つたといふことである。其の意は、木下藤吉郎秀吉は木綿のやうに何にでも使へる重寶な男、丹羽五郎左衛門長秀は米のやうに一日も無くてはならない。さて戰爭の時に伏勢となつて不意に敵の虚を衝くには猛勇無雙の柴田勝家に限り、一旦敗軍の際に退けば殿りとなるものは大勇沈毅の者でなければならぬ。それは佐久間信盛が適任だといふのらしい。此の二首は實に近代民謡中最も勢力ある七七七五形を更に細分して考へた三四・四三・三四・二三(三二)といふ形の發生期を告知するものである。こんな形の歌はもつと古くから幾つともなく諷謡傳唱されてゐたに相違ないが、一向記載されてゐない。

江戸時代の記載 上下三千載を通じて、文藝の發達したのは。上にして平安朝時代、後にしては江戸幕府時代と明治大正の現代とである。江戸時代は其の當初文藝復興の意味に於て、古典風の貴族文學が起り、次いで元和以降の太平は、次第に武力よりも金力といふことになつて、町人百姓が必ずしも武士に押へつけられてのみはゐないことになつた。さうして俳句小說戲曲の類、平民文學が續出して、眞に空前の偉觀を呈するに至つた。かういふ時代に、民謠の榮えない理由はない。さうして又書留められない理由はない。果して民謠は歌謠集中に缺くべからざるものとなつた。さうして

吉原流行小唄總まくり　（萬治寛文年中刊）

萬歲躍　（萬治三年刊）

ぬれほとけ　（萬治年中刊）

山家鳥蟲歌　（諸國盆踊歌、明和八年刊）

の類を始めとして、何々節と稱する流行唄の書、何々音頭・何々口說と稱する踊歌の書は、續々と刊行された。他に民謠以外の技巧歌を多く入れたものには、

糸竹初心集　一卷　（寛文四年刊）

大幣　一卷　（貞享二年刊）

糸竹大全　四卷　（元祿十二年刊）

松の葉　五卷　（元祿十六年刊）

落葉集　七卷　（寶永元年刊）

若綠　五卷　（寶永三年刊）

增補松の落葉　七卷　（寶永六年刊）

續松の葉　四卷　（正德四年刊）

の如き著名な集が出て、此等の書の歌の何分の一かは民謠又は民謠扱にすべきものである。

文權が江戸へ移つてからの寶曆明和以降は絃曲粹辨當の如き流行唄を集めたものも刊行され、京傳・三馬・一九・春水等の小說に數多く綴込まれた外に、好事家によつて江戸を主にしたもの、京阪地方を主にしたもの、乃至は名古屋を中心にした流行唄の書留類も出來、集も作られ、特に文政以降に入つては潮來節や、よしこの節や、どどいつ節・大津繪節・さうかい節・じようや節・さいの節といふ類の歌を蒐めた小冊子が幾らともなく刊行された。ちよんがれちよほくれ類迄刊行された。自然江戸幕府時代だけは、民謠研究の上にそれ程

史料の空乏を訴へるにも及ばないのである。

現代民謡の蒐集　明治大正に入つては音曲博士、粹士必携懐中音曲書などと題するものが隨分多く出てゐることは改めて說くにも及ばず、文部省で設けた文藝委員會から出した俚謡集及び此の集に漏れた歌を蒐めて、私が大竹紫葉といふ人と共に編んだ俚謡集拾遺も世に出て居るのである。さうして現代民謡の研究は其の曲節と歌詞と併せてなせばなし得るのである。然るに過去の民謡即ち其の曲節の絶えたものは、其の歌だけに就いて調べもし評を下しもしたそれに慣れて、現代の民謡を考察するにも、動もすれば其の音樂的方面を閑却するもののあるのは惜しむべき悲しむべき事に屬するのである。

三　民謡と國民性の發露

我が國民性　一國民共通の性質で、他國民のそれと比して特色のあるものをさして國民性といふのである。此の特性は政體・法律・文學・美術・風習等の上に表れ、他國民の文化に接觸しては、それと混合し、融和して、長年月の間には相當の變化を惹起する處のものである。

亞細亞洲中文化が比較的に遲れてゐた我が國は、支那と印度との文化に觸接して、政治法律文學美術等の上に尠からぬ影響を被つたのであるが、此の影響は我が國民性の上にかなり別種の色彩を添加した。彼の花鳥風月を賞愛することは、我が古代の人々には全く缺けてゐたことで、奈良朝以後之を愛玩し諷詠するやうになつたのは、支那大陸から入込んだ文化に導かれた爲であつた。又未來觀と罪惡觀の下に成立する宗教思想の如きも、我が大和民族には缺けてゐた。それが佛教の輸入によつて生々流轉といふ輪廻思想や淨土往生といふことを考へるやうになつて來た。又近く西洋諸國の思想に接しては、國民に自我の念

即ち個人主義の考が湧き上り、最近には社會主義思想が流れ込んで、上下兩層を脅して居る。將來此等の思想が融合し得た曉には、また別異な國民性を見出すことになるであらう。

芳賀矢一博士は其の著國民性十論に於て、

忠君愛國	祖先を崇び家名を重んず	現世的實際的	草木を愛し自然を喜ぶ
樂天酒落	淡泊清潔	纖麗纖巧	清淨潔白 禮節作法 温和寛恕

の十を我が國民の特性として說かれた。まことによく明るい方面から見て遺憾なく列擧されてゐるが、此の反面には英國民の如くには堅實でなく、耐久力がなくて沈著を缺い居り、米國民のやうには自主自尊の念に富まぬこと、活動進取を好まぬこと、獨逸國民の如くには勤儉でなく又秩序規律を守らぬことが存在するのである。自由を愛し藝術を尊重するといふやうなことも到底佛國民の如くではなく、前記の十の長所があると共にまた此の短所をも有するのである。此の長短兩面は文藝宗教制度風習、あらゆる方面の上に表れてゐるのであつて、此のあらゆる方面から考へて國民性なるものは論究すべきである。但其の最もよく表れるのは文學の上に於てである。詩歌小說戲曲等の純文學と、美的要素に富む史書や隨筆や紀行日記類と、此の兩方面から材料を求めたならば希くば、大した錯誤に陷らない

說明を試み得るのであらう。

國民性と民謠　然るに此處には、詩歌の一部分たる民謠の上に如何に表はれてゐるかを說明しようといふのである。元來民謠の主として詠ずる處は、何れの國にあつても男女間の愛情に關することで、これに多少の諷刺や敍景や、時に祝賀の意が謠ひ出されるといふに止まるのである。西洋諸國のには神を讃美したものがあるが、わが日本にはそれがなく、支那の古民謠の代表者詩經などと同じく、男女間の愛が何時の世にあつても主材となつてゐるのである。

愛に關する民謠の變遷　男女間の愛にもさまざまある。其の歡喜を詠じたものもあり、失望と懊惱とを詠ずるものもあり、別れの苦しみ、待つ間の悶え、遠く離れるてのあこがれ、和歌に所謂、

初戀　忍戀　不言戀　顯戀　聞戀　恨戀　不逢戀　祈戀　契戀　契待戀　初逢戀　別戀　後朝戀　契變戀　絕戀　違約戀　忘戀　夢遇戀

等を謠ひ出したものがあるべく、月花雲風山川關旅、乃至は枕や着物に寄せて思を述べたも

のもあつた筈である。而して此等の上に何等かの國民性の發露を見出し得るであらうか。それが出來れば、要めるところに多少なりとも滿足を與へ得るのである。民謡記載の缺乏は之を成し遂げさせさうもない。以下時を追つて略述を試みる。

東歌　紀記の歌には此の目的に合するものはありさうもない。降つて萬葉集に入れば、東歌と正述心緒歌と寄物述思歌の類があつて、これには漸く愛に關する各方面の歌が見出される。さうしてそれが嬉しいことには、後世の勅撰和歌集の戀の部に見るが如き假空な技巧本位なものでなくて、

玉川に晒す調布さら〳〵に何ぞこの兒の巨多愛しき(武藏)

上つ毛野安蘇の眞麻群かき抱き寢れど飽かぬをあどかわがせむ(上野)

筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着ほしも(常陸)

柳こそ伐れば生えすれ世の人の戀に死なむをいかにせよとぞ(國不明)

の如き至情の迸り出たものが多いのである。勿論男女の愛は肉の滿足よりも、其の滿足を得られない苦悶乃至は滿足を得るまでの懊惱の方が遙に詩的情味に富むので、自然此の方面の歌が多く遺存する。

夕占にも今宵と占らろ、吾が夫は何故ぞも今宵寄しろ來まさぬ(國不明)

戀しけば來ませわが夫、垣内柳　末抓み枯らし吾立ち待たむ(國不明)

足柄の箱根の山に粟蒔きて實とはなれるを逢はなくもあやし(相模)

新室の竈時に至ればはだ薄ほに出し君が見えぬ此の頃(國不明)

此等は何れも待戀の歌といふべく、

戀しけば袖も振らむを武藏野の白朮が花の色に出なゆめ(武藏)

わが夫をあどかもいはむ武藏野の白朮が花の時なきものを(同)

伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど吾が戀のみし時なかりけり(上野)

此等は忍戀といふべく、古風な三十一文字の歌であるが爲に、何となくこれが本當に目に一丁字のない人々が口にしたものかしらと疑ふ人もあらうが、これが其の時代の民謡形であつたのである。さうして其の想に至つては萬代不易ともいふべく、最後の歌の如きは

伊香保山風吹かぬ日はあれど君を思はぬ時はない。

とすれば全く近代の歌となつてしまふのである。

足柄の御坂恐み隱り湯のわが下ばへを言出つるかも(相模)

伊香保ろの八尺の堰に立つ虹のあらはろ迄もさねをさねてば（上野）
川上の根白高萱あやに〳〵さ寢〳〵てこそ言に出にしか（國不明、相聞）

は顯戀の歌である。契戀としては

うち日さす宮のわが夫は大和女の膝枕く毎に吾を忘らすな（國不明）

を擧ぐべく、これに違ふ歌としては

筑紫なる匂ふ兒ゆゑに陸奥の香取少女の結ひし紐とく（陸奥）

を擧ぐべく、これは防人の歌で、再び逢ふ迄此の下紐は解くなと、香取少女の結んだのを、美しい九州女の爲に解くといふのである。以上は何れも東歌の中から拾つたのであるが、此の類の歌は萬葉集卷十二の正述心緒歌にも寄物陳思歌にも多くの好適例を見出し得るのである。けれども此等の上に特殊の風習は見えても、わが國民性がさう現れてゐるとも思はれない。さうして芳賀博士の擧げられた十種の性質のどれにも入れ得べくもない。

夫婦關係の歌　降つて平安朝時代の民謠に就いて考へて見る。これにも

雞は鳴きぬてふ　今朝くらまぎれ　下紐の緒にすがりゐてこそとどこほれ　泣く子な

すまで（催馬樂）

の如く前代の民謠に入れて見たいものもあるが、當代に入つては其の內容もやうやく複雜になつた。

夏引の白絲七斤あり　さ衣に織りても着せん　汝妻はなれよ。
かたくなにものいふ女かな。汝麻衣もわが妻の如く着よく肩よく　襟やはらかに縫ひきせめかも。（催馬樂）

の如きは萬葉集卷十二の

雜渡人葦火たく屋の煤したれどおのが妻こそとこ珍らしき（正述心緒歌）

の歌と共に、後世の諺に「女房と味噌は舊いほどよい」といひ、川柳に「家內安全女房に惚れてゐる」といはせると同一の意で、家を單位とするわが國の組織は、夙くから主婦に飽く迄も內治の功を求めて、「女房は家の寶」なることを說いたものといふべきである。けれどもこれと共に「女房と疊は新しいがよい」と諺にいひ出した我が國民は、元來一夫多妻主義で、又離婚をさう大きな問題とはしてゐなかつた。古く出雲の八千矛命が越の沼河比賣を婚ひに出かけて、隨分濃厚な事を演ぜられたので、妻の須勢理媛が嫉妬の意を表され

た。すると命は倭の國へ逃げ上らうとして、片手を馬の鞍にかけ、片足を鐙に入れて、お前は泣かないといふが、後で必ず泣くだらうよといふ意の長い〳〵歌をよまれた。其の時媛が盃を捧げて謠つた歌の中に、かういふ句がある。

八千矛の　神の命や　わが大國主、汝こそは　男に坐せば、打ち見る　島のさき〳〵
かき見る　磯の綺落ちず　若草の　妻持たせらめ。吾はもよ　女にしあれば、汝を置きて　夫はなし　汝を置きて　夫はなし。

一夫多妻と妻の貞操とはよく此の上に現れて居る。此の歌は神代のものではなく、ずつと後代のものが誤つて、古事記の神代の卷に編入されたのだと說く人もある。恐らくさうであらうが、それにしても古事記編纂當時より數十年いや百年以上位は古い時代のものとして考へなければならぬのである。思ふに、祖先を崇拜し家名を重んずるわが國民は、其の民族の血統を重んじて、婦人には貞操を强ひ、婦人も亦それを其の分として甘んじてゐたのである。固より夫婦相愛は眞に其の家の安全、延いては國家の安泰を生む所以であつたのである。然るに操行の上には解放されてゐた男子は、二妻も三妻も取るばかりか、人妻の上にも手を伸ばした、恐らく上代亂婚時代の遺風であらうが、次のやうな歌がやはり實

際謠はれた東歌の中にある。

崩岸の上に駒を繫ぎて危かれど人妻子ろをいきにわがする。

人妻となどかそをいはむ。然らばか隣の衣を借りて着ぬはも。

人妻を命がけに思ふの、人妻は着物同樣だのといふので、隨分驚かされる歌だが、此の風習は東國地方ばかりでなく、文化の進んでゐた京洛の地と、其の附近と、それを西に去つた四國九州地方とに何の差異もなかつたのである。此のことは他の所謂和歌や稍後れて出た物語類がよく之を證するのである。平安朝時代に行はれた雜藝といふ謠ひ物に、

盃と鵜の食ふ魚と女子とは法なきものぞいざ二人寐む(神歌)

これも人妻たることは明かであり、武家時代に入つても、

人の妻見てわが妻見れば、深山の奥の苔猿めが、雨にしよほぬれて、ついつくばうた

に、さも似た(狂言、花子)

と謠つてゐる。これにもあはよくば手を出したい心持は十分に現れてゐる。武士道德が成立する頃又は成立した頃は、勿論これを排斥したが、後の儒敎の訓へが擴がる德川時代程にはやかましくなかつたのである。然るに女の方では

君をおきて仇し心をわがもたば末の松山浪も越えなん（風俗歌）

と貞の德を守つたのである。これは祖先崇拜の性情が、いつも心の中に働いた結果、家々氏々の血統を重んじて、愛の自由などは叫ばなかつたものとして考ふべきである。

銑錬された歌　愛の歌の中で、至情の溢れてゐるものは何としても奈良朝時代の東歌であつた。平安朝時代にも勿論さういふ歌が庶民の間に行はれたのであらうが、催馬樂以外には古い頃のものは遺つてゐない。これには可成露骨なものがある。降つて雜藝に至つては大きに銑錬された歌に出逢ふ。

我をたのめて來ぬ男　角三つ生ひたる鬼になれ。さて人に疎まれよ。霜雪霰降る水田の鳥となれ。さて足つめたかれ。池の浮草となりねかし。兎搖り角搖り、搖られ歩りけ。（神歌）

の如き恐ろしいものもあるが、概してはー

雞はかけろと鳴きぬなり。起きよ〳〵、わが一夜夫人もこそ見れ、人もこそ見れ。いで我が駒早行きこせ待乳山アハレ待乳山ハレ待乳山、待つらむ人を行きてはやアハレゆきて早見ん。（我駒）

常に戀するは、空に織女流星、野邊には山鳥、秋は鹿、流れの君達、冬は鴛鴦（神歌）

思は陸奥の國、戀は駿河に通ふなり。見初めざりせば中々に、そらに忘れてやみなましし（神歌）

の如くに謠はれた。

近代の愛の歌　民謠上に於て古代味と近世味との限界をなすものは應仁の亂である。此の亂は一切の典籍を泥土に委せしめたり烏有に歸せしめたり、目に文字のあつた公卿や僧侶を離散せしめたりして、古來の典禮朝儀も一時こゝに杜絶された。眞に悲しむべき情態に入つたのである。けれど幸にも音藝方面は一向沈衰しないで、却つて古代の因襲を離れて新に近代人の趣味に合するものを演じ出すに至り、古典に通じない一般民人の聲卽ち民謠が書留めもされれば、當代を代表する處の文學たる謠曲や狂言の中にも綴込まれた。さうして現代の吾人に十分なる親しみを感ぜしめる處の民謠は、上古中古のそれにあらずして應仁以後に出た此等のものである。

室町幕府時代の民謡を代表するものは閑吟集所載二百幾十首であるが、これには鬼角あきらめた戀の歌が多い。盛衰興亡の激甚な戰國時代、禪宗其の他の宗派によつて說かれた執着心を去るといふことが漸く人心に浸みこんで、それが民謡の上に現はれたといふのであらうか、住みにくい世は隱忍といふことを人々に需めた結果であらうか、愛の上の哀愁失望懊惱等を歌つても、皆傷んでやぶらぬといふ程度で、自暴自棄破壞革新等には更に觸れて居らぬ。

筆で一度いうて見う、いやならば我もただそれを限りに。

の類が多い。

葛城山に咲く花候よ。あれをよと、よそに思うた念ばかり。

戀風が來ては袂にかいもとれて、喃袖の重さよ。戀風は重いものかな。

は忍戀といふのであらう。前者は「花は折りたし梢は高しながめくらすや木の下に」といふ盆踊歌や「折ることも高嶺の花や見たばかり」といふ句の前驅、後者は狂言の枕物狂に、淨瑠璃の保名(清元節の名曲)に永く謡はれるものであるが、さう謡はれるだけそれだけ銑錬されてゐた歌で、消極で、內氣で、ひとりで惱むといふ歌である。恨戀や待戀にしても、

よしやつらかれ中々に、人の情は身の仇よなう。

とがもない尺八を枕にかたりと投げあてても淋しや獨寢。

身は浮草の根も定まらぬ人を待つ。正體なや喃。ねろやれ月の傾く。

淋しさはどの歌にもついてまはつてゐる。

江戸幕府時代に入つては文藝は百花繚亂の狀であつた。町人百姓は其の富の力を以て武士階級と張り合ひ、戲曲小說俳諧等に於て文學の上にも立派に地步を占めた。さうして民謡も亦空前の勢を以て榮えたことは前述の如くであるが、其の男女の愛に關するものに至つては、千古不易の理を示して別段の新味を現して居らぬ。淋しさは、あきらめは、隱忍は、苦悶は、過去と同樣に謡ひ出された。

前代と當代を繫ぐものは隆達といふ人の創めた小歌節であつた。其の小歌には自作もあり世に行はれてゐた民謡も勿論含まれてゐたが、其の愛に關する歌は、耽溺や棄鉢の氣分といふよりも、淋しさや、あきらめに觸れてゐる。例へば

見るめばかりに波立ちて、鳴門船かや阿波でこがるゝ。

明日をも知らぬ露の身ぞ、せめて言葉をうらやかに。
月待つ月は冴えもせで、君待つ月は冴ゆるよの。
雨の降る夜のひとり寝は、何れ雨とも涙とも。
長の枕に廣のしとねや、明けぬ夜や、さて棄てらるゝ憂き身は。
獨寝もよやの、曉の別れ思へば。
曇らば曇れ、照るとても、君を思ひの晴るゝでもなし。

の類であつた。これに次いで出た弄齋節の歌も同様の愛を謠つた。其の弄齋の頃より少し後にかけて出來上つたのは三味線の組歌である。固より其の全部が民謠で、古い狂言の小歌もあれば、其の世の踊歌もある。無闇に寄せ集めて長篇の歌の代用にしてあるので、愛の歌にも様々のがある。

我が戀は千本小松の枯るゝ程、田居が水干て埃立つ程。
待つにござりたいとしの君や、ノウ今夜ござらにやこがれ死なう。
君と我とはノヤ框の絲の、切れて離れて又結ぶ。
思ふ儘なる今宵かな、月は朧に君は來て。

山で小柴をしむるが如く、こよひ其様としめあかす。
とても立つ名に寢てござれ、寢ずとも明日は寢たと讃歎しよ。

と、熱烈の度を謠つたのもあれば、戀の歡喜を敍して、目前の樂欲には後日の苦患を念頭に浮べない、凡人愛の有様を詠じ出したものもある。但、人の同情をひき易いのは、やはり失望や苦悶を述べたもので、

思ふまいよの、やれそれ程に、顏に紅葉の龍田山。
いつの何時そなたを見初め、われが身はたゞ磯邊の千鳥、鳴かぬ間もなや君故に。
眞の闇にも迷はぬ我を、あゝ扨て其様の迷はする。
七里小濱の、砂の數程思へども、緣が薄いやら添ひもせぬ。

の如き歌はどうしても多く、「とても立つ名がやまばこそ」といひ、「返事さへせぬ憂さつらさ」又は「袂ひがたき吾が思」が兎角に出て來るのである。それでも組歌の中にはまだ〳〵遊女關係の愛の歌は殆ど目に止まらず、あつても一種の運命觀に成る處の、

昔より今に渡り來る黑船、緣がつくれば、鰹の餌となる、聖聖母。

位のものである。これは恐らく長崎は圓山あたりの女の謠ひ出したものであらうが、當時

マリアを航海の神と崇める考の輸入されたことも知られて、一寸横目にかけただけでは濟まされない歌である。

愛を弄んだ歌　寛永以後の遊里の公設、一種の政策の下に公然許可されてゐた遊里は、今の公設市場と異らないものであつた。其の賑ふことは、商品取引の如く考へられることは、島原と新町と吉原と敢て擇ぶ處がなく、堺の乳守、伏見の撞木町、奈良は木辻鳴川、津々浦々の最低級の遊女迄が手管の張のといふやうになつては、愛を弄ぶ歌が榮えて、ふざけ氣分が加はつて、浮かれ味が基調をなすべきである。男がさうなら、女もかうと、互に探り合ひをなして、打算的に考へもすればそれを歌に謠ひもした。おしまひにはそれが遊里だけでなく、世の中一統のこととなつた。遊里公許は一面には愛の翫弄を敎へることになつたのである。

一夜落つるはよもやすけれど、身より大事の名が惜しい（諸國盆踊歌、河內）

心中しましよか髮切りましよか、髮ははえもの身は大事ヤアレヤレ〳〵（同上、伊勢）

さまは釣竿わしや池の鮒、釣られながらも面白い（同上、佐渡）

今の若い衆は麥わらだすき、一夜かけてはかけずてに（同上、播磨）

これは皆男女が輪を造つて踊る時の歌である。音頭取に誘はれて一同は其の後半を反復合唱したのである。でなくとも音頭取にかう謠はれて、それに默從してゐたのである。

元來遊女乃至は浮氣商賣の者に貞操の考のあらう筈はなく、それと鉛男のぬらくら者との間には、眞實の愛の存立しよう道理はない。

末は遂げぬと初手から知れど、それに惚れたがわしが科（潮來節の歌）

うそぢやないのに茶にするお前、ほんに私はエ、じれつたいわいな（同上）

かねて二人が死ぬのは承知、今日は友びき日が悪い（都々逸）

ほれたを承知で氣休めらしく、おつにあやなす人ぢらし（同上）

堤あがれば柳のしづく、ちよいとぬれたも緣のはし（同上）

こんなのはまだ浮氣沙汰といふだけであらうが、

お前實なら生爪はなせ、わたしや五本の指を切る。

に至つては、さぐり合といはうか、知りぬいて茶にしてゐるのだといはうか。個人主義が旺盛な今日、自由と放埒とを取違へてゐる者の多い當代、肉と心とは分けて考へるなどと

說く年若の女もある現時、こんな考が一般民人に擴がつたら、さてどんな愛の歌が謠ひ出されることであらう。

私が思ひは箱崎濱よ。外にハキタ。木はないまつばかり。世話やかしやますな、私が勝手に主を待つ。〔明治四十二年しやますな節〕

では止まらない、もつと〳〵恐るべき歌が出はしないかと、それが案じられるのである。けれども是等一切はむしろ歌謠と世相とでも題する條下に述ぶべきことに屬するであらう。よつて再び國民性の發露如何といふことに戻つて考察を試みる。

忠君思想　天平勝寶元年四月の詔に大伴佐伯二氏の祖どものいひ傳へて來た歌として

海行かば水漬く屍　山行かば草むす屍　大君の邊にこそ死なめ　徒には死なじ。

これを擧げてあるが、大伴佐伯の武を掌る家ばかりでなく、一般の者もかう考へてゐたことであらう。國人は皆皇室を總本家だと思ひ、天皇を總本家の御主人として考へてゐたのである。則ち君臣の關係は家族關係の擴張で、今上御卽位の勅に「義ハ則君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノゴトク」とあるが、實にかう考へることは上世からのことであつたのである。

民衆が總本家の經營に參加しなかつた上古にあつては、此の關係を詠つた民謠なるものは當然記錄の上に見えてゐない。此の大伴佐伯の祖先が謠ひ傳へたといふこれが先づ其の最も古いものであらう。次には今我等が國歌として用ひてゐる君が代の歌である。これは古今集に讀人不知として掲げてあるもので、民衆一般の聲であつたのである。此等民衆が總本家乃至は其の御主人を謳歌し翼贊しようといふ念は續々謠ひ出され、且つ書き記さるべきであつたが、藤原氏が政權を掌握するに及んでは、國民は直接には郡司、國守、溯つては攝政なり關白なりを戴くといふ形になつて、最早

大君の命かしこみ、かなし妹が手枕はなれ役立來ぬかも（東歌）

の如き民謠は出ないことになつてしまつた。さうしてこれに代ふるに、權勢ある人の榮華を讃歎する祝賀の聲を以てするに至つた。

此の殿はうべも富みけり、さき草の三つは四つはに殿造りせり（催馬樂、此殿者）

此の殿の西の倉垣、春日すら行けどもつきず西の倉垣（同上）

と謳ふに至つた。

君を始めて見るときは　千代もへぬべし姫小松

お前の池なる龜が岡に　鳴こそむれるて遊ぶなれ」
新年春くれば　門に松こそ立てりけれ
松は祝の物なれば　君が命ぞ長からん」

武家時代にはかう謳つた。あやかつて長命するであらうとか、全盛の君は長壽を保つであらうとかいふに止まつて、事しあれば命も何も捧げまするとはもう民衆は謳はなかつた。一般民衆は將軍や殿様を天皇とは同一視しなかつた。將軍や殿様は自分と同様の人間だが、運がよくて自分たちから租税を取り上げるだけの人だと考へてゐた。こゝに忠といふ意味は天皇に對する意味よりは低められて、直接頭に戴く主人に迄引下げられた。さうして其の主人に對しても、

天に照る月は十五夜が盛り、わが君様はいつも盛りよの（飛驒の踊歌）
殿の御殿に白羽の鷹が御知行ますかよ巣をつくる（甲斐の木遺歌）
これのお館繁昌なさる。奥は琴の音中の間は鼓、かどは物申が絶えませぬ。（盆踊歌、石見）

といひ、または

野にも山にもお主さまよかれ、お主のお蔭で世に出づる（盆踊歌、攝津）

といつて、自己の利益打算から主の繁昌を願ふだけで、御代の長久を祈り、それを害する者があれば、献身的にこれに對抗するといふやうな上世風の歌は武家時代の民謡には見出されなかつた。これが明治維新が急忽の間に成し遂げられた一大原因であつたであらう。

祖先崇拜　祖先崇拜はどの國にあつても古代には行はれたが、現今迄遺存してゐるものはない。然るにわが國は太古以來一貫して居る。これは萬世一系の皇室を戴いた爲であり、又個人々々が其の家を愛した爲であり、ひいて長上を尊敬した爲であつた。もつと委しくいへば、上古は氏族制度で、同一の祖先から出た團體が、其の氏の守護神を祀つて氏神とし、氏神の崇拜は血族關係と相俟つて其の結合を鞏固にしたもので、家といふのは此の氏の分れで、直系の血族以外に、傍系の血族、即ち親子兄弟以外に伯叔父母甥姪從父兄弟の如き親族をも包含してゐるものをいふのであつた。氏には氏の上があり、家には家の長があつて其の一團を統率したのである。（日本社會史）

古代神前で奏した祝詞にも天地開闢から述べ立て、歌聖柿本人麿の歌にも此の形式に成

るものに傑作が多い。一般に敬神の念が盛んで、これも祖先崇拜に外ならないのである。武士の家名を重んじたことは、戰記物以下近代に至る迄の武士の逸話には無數にこれが存し、お家の寶の紛失が多く御家騷動の基となつてゐるが、これも祖先の大切にしたものを、其の子孫が失つては相濟まぬといふ所から起るのである。

一家の和合　一般民衆にあつては、此の歴史家的の理由は會得せず、たゞ〳〵先祖の遺してくれた家屋田畝を大切にして失つてはならぬ。商家にあつては暖簾を汚してはならぬと考へて、いつも當面の問題としては其の家を本位にして其の和合を考へて居つた。家の問題としては和合が第一で、それには親子の愛と嫁姑の親睦とが第一に數へあげられるのである。こゝに祖先崇拜の思想は古く歌人の技巧歌に於て高唱せられ、近代は民謡に於て、

野にも山にも子なきはおきやれ喜の倉より子は寶（盆踊歌、對馬）

山が燒けるが立たぬか雉よ、これが立たりよか子をおいて（同、紀伊）

と黄金よりも白珠よりも子の愛重すべきが謡はれた。又

親が片親ござらぬ故に人も侮りや身もやせる（同、河内）

親は此の世の油の光、親がござらにや光ない（同、攝津）

人は美（けな）りや親樣二人、私は入日の親ひとり（同上）

親といふ字を繪にかいてなりと、肌の守と拜みたや（同上）

と親の尊むべく感謝すべきを謡ひ、親と子との情愛を比較しては、

親は子というて尋ねもするが、親をたづねる子は稀な（盆踊歌、但馬）

と謡つた。

嫁姑關係に就いては更に斬込んだものがある。

知つて居れども人に又問うて、母の差圖で迎取れ（盆踊歌、駿河）

家本位の風習であれば、求婚は親に任すべきを論したのである。又姑が新婦をさいなむのを戒めては、

嫁をかはいがれ嫁にこそかかれ、娘他國の人の嫁（同、和泉）

嫁を〳〵と嫁そしりやんな、そしるわが子も人の嫁（同上）

と高唱した。さうして新郎の苦衷を謡つては

あきもあかれもせぬ中なれど、暇やります親故に（同、河内）

といひ、幸にして妻に破鏡の歎なからしめた男の心は

往なしよ〳〵と思うた中に、太郎が生れて往なされぬ(同、隠岐)

と謠出して、子は夫婦一家の鑑なることを告げてゐる。さうして子よりも孫のかはいさを

敍しては

お婆どけきやる三升樽さげて、よめの在所へ孫だきに。

といひ、もし又否運にも去られたよめの心を露しては

月の夜にさへ送りをもろて、見捨てられたよ閨の夜に(同、越後)

と謠ひ、さとの母の不安を述べては、

雨がふろとて沖から曇る、娘去ろとて婿が來ぬ(同、阿波)

と謠つた。此等は皆一家の和合は一國隆昌の基で、これが祖先に忠なる所以であるといふことを知らず識らずの間に謠ひ出したのである。さうして祖先崇拜と忠君愛國とは合致して背反せぬ處に、わが國體の卓絶せる處を見るべく、親夫婦子夫婦が和合して同棲するのが美風とされてゐたが、近來新夫婦別居說が唱へられ、やゝもすれば夫婦は相互の愛を重んじて、子は雇人委せにするといふ西洋風が輸入されて來た。幸にして一般民衆はまだこ

れに感染せず、隨つてこれに關する感想を述べた民謠はまだ出たとも聽かぬが、他日此の悲しむべきことが普及するであらうか、恐らくそんなことはあるまいと信ずるが、それが實現する時は、民謠處か古來の國家組織の崩れる時で、日本國體にとつての危機といはなければならぬ。さうしてそれが富豪や皇室の藩屏たる貴族社會に行はれ初めたことを考へると、吾人は現代に對して、一方ならぬ皮肉を感ずるのである。

現實的　上代のわが國民は死ねば其の遺骸が醜くなる爲に之を忌み嫌つたが、死を恐れたことはない。又死ねば黃泉國へ行くとは考へたが、それも生存中の所行如何によつて行く先が違ひ、又生れ變り死に變りするといふやうな佛教でいふ輪廻のやうな考は有して居らなかつた。すなはち飽く迄も現世に卽するもので、其の罪惡觀の如きも

天津罪　畔放(アハナチ)　溝埋(ミゾウメ)　樋放(ヒハナチ)　頻蒔(シキマキ)　串刺(クシサシ)　生剝(イキハギ)　逆剝(サカハギ)　屎戸(クソヘ)

國津罪　生膚斷(イキハダタチ)　死膚斷(シニハダタチ)　白人(シロヒト)　胡久美(コクミ)　己母犯罪(オノガハハオカセルツミ)　己子犯罪(オノガコオカセルツミ)　母與子犯罪(ハハトコトオカセルツミ)　子與母犯罪(コトハトオカセルツミ)　畜犯罪(ケモノオカセルツミ)　昆虫乃災(ハフムシノワザハヒ)　高津神乃災(タカツカミノワザハヒ)　高津鳥乃災(タカツトリノワザハヒ)　畜仆志(ケモノタフシ)　蠱物爲罪(マジモノセルツミ)

の如くに考へて、殊に大切に考へた天津罪の如きは殆ど皆農事耕田に關することであつた。

まだ慈悲に背くこと、愛の道に背くことを以て、罪と考へる迄には及ばなかつた。いや未來觀を有たぬと同時に、宗教上でいふ罪惡觀は有たなかつたのである。

農業本位と宗教心　元來大和民族は農を本とする習はしであつた。豐葦原の瑞穗國は、葦がよく繁つてゐてあのやうに大きな穗を出す位なら、稻には適すると、當初に天照大神のお考へになつたのが本で、わが民族は此所に定住して農を定業としたのである。夫れ農は天然が相手である。天の時が至らなければ熟すべきものも決して熟せず、實るべきものも決して實らない。ただ人事をつくして天命を俟つべきものである。用ふる力の多少は覿面に收穫の上に現れるのである。さうして稻の栽培は其の手數と勞力と時日とを要することは、主要食物を得べき植物中他に類例が無い程の厄介物である。耕作者の日中の勞苦は、日の暮れると共に、睡眠といふ休息を要求する。何の暇があつて思索に耽ることが出來よう。何の餘力があつて月にうかれ蟲にききとれてゐられよう。自分は上代の吾が民衆に宗教心と花鳥を樂む風雅心のなかつたのは怪むに足らぬと思ふ。支那や印度の文化が入り込んでも、宗教や文藝は永い間貴族連の翫びたるに過ぎなかつたのである。上代歌謠には固より宗教や風雅に關する歌謠は一首もない、奈良朝に入つては無常や輪廻を詠ずる

技巧歌は出たが、それは全く貴族連の際つぶしにのべたもので、佛寺の建立は鎭護國家の爲であり、一族繁榮の爲であり、僧侶は今でいへば哲學の研究に從事して化導といふことには重きを措かなかつた時代である。此の時代に、どうして民衆の間に宗教心が植ゑつけられようぞ。東歌の類にはそんなものは一首も見えて居らぬのである。降つて神樂や催馬樂や風俗の類にも一首も見えて居らぬ。

宗教心の空乏　平安朝時代には讃歎・教化・和讃・訓伽陀（くんがだ）等の名の下に宗教上の謠ひ物はあつたが、それは僧侶の手に成つた純粹の技巧歌であつた。此の技巧歌を謠ふ曲節の俗化したものは今樣であつた。法文歌であつた。神歌であつた。吾等は之を總稱して雜藝と呼ぶのであるが、此の半ばは佛教の旨趣を說くものであつた。作者の知れず時代のしかと知れぬ點からいへば、民謠であるが、其のいふ處は僧侶說教師の口吻で、到底此の佛歌の全部を民謠視することは出來ないのである。

惠心院僧都によつて高唱された淨土往生思想は空也以下の者によつて宣傳せられ、法然に至つて淨土宗が立てられ、親鸞によつて淨土眞宗が立てられて、始めて諸人に極樂淨土往生の思想が吹込まれたのであつた。さうしてこれがわが民族の佛教を最も消化した處の

總計であつたともいひたいのであつた。雜藝時代に

我等は何しに老いぬらん　思へばいとこそあはれなれ

今は西方極樂の　　彌陀の誓を念ずべし」

我等が心に隙もなく　　彌陀の淨土を願ふなり

輪廻の罪こそ重くとも　　最後に必ず迎へ給へ」

の如き民謠として考へたいものも出てゐないのではないが、それは甚だ尠く、他の記錄類に民謠として此等を擧げてないので、之を民謠と斷定するに惑ふのである。遊君白拍子が之を諷謠した上からは、やはり之を民謠と見たいが、朗詠類が同じく謠はれたことを思へば、それも打消すべきであると思ふ。

降つては西國巡禮歌である。これだけは民謠扱をもなし得べき宗教的歌謠であるが、其の內容を檢すれば、渴仰讃稱の意は極めて少く、羈旅の哀愁や風色を敍したものが多い。

岩を立て水を湛へて壺阪の庭の沙も淨土なるらん。

の如きものは辛うじて見出されるもので、

夜もすがら月をみむろと分け行けば宇治の川瀨に立つは白浪。

野をも過ぎ山路に向ふ雨の空、良岑よりも晴るゝ夕立。

月ともに波間に浮ぶ竹生島船に寶を積む心地して。

の如きものが多い。かうした歌にどうして宗教上の信仰などが見出されよう。吾が日本人は冥想煩悶懊惱といふ途をたどつて宗教の門をくぐることは欲せず、快活に自然を愛して一生を送つたものといはなければならぬ。武士は隨分よく寺を建てたものである。僧侶は說教に舌をたゞらしたものである。盆踊は寺の庭に於て多く踊られたものである。然るに其の盆踊歌なるものにも、宗教的意味のこもつてゐるのは、和讃と口說と稱するものの一部とだけで、

極樂淨土に願かけん、助け給へや彌陀如來（大分縣、盆踊歌）

人間わづか五十年、朝咲く花の朝顏の露の命を持つ程に、一時の後生を願ふべし（同上）

歸命頂禮箱根山ヨイヤサーヨイヤナーかゝると思へば雲かゝる。雲に邪慳がなければも、我が身に邪慳のあればこそ、四國西國巡りても、我が子に似たる人もなし。內へ歸りて寺參り、寺へ參りて花見れば、咲いたる蓮華の散らぬうち、蕾の蓮華が散りは

ねた。花も我が子もあの如く……（新潟縣盆踊歌シュンガヤ節）

といふの類は少く、却つて滑稽風口說といつたやうなのが多い。

鉦を叩いて佛にならば神田鍛冶町は皆佛。

後生を願やれぢさまと婆樣年寄來いとの鳥が啼く。

おらが若い時や、印籠巾着下げたが、今ぢや年より皺寄り御寺の過去帳に着くばかり。

などと、死といふ人生の一大事をふざけ半分洒落まじりに謠つてゐるのである。過去の我が國民は民謠上から見れば、決して宗教の民では無かつたのである。古くは

頭（あたま）からほつかりとかけた新茶は釋迦も濡れ佛ホウヤレホヤレホ

と謠つて灌佛會の釋迦までも色好みの濡れ者と見なし、今もなほ

どうせするなら大きな事おやり奈良の大佛屁で飛ばせ。

と謠つてゐるではないか。

死んで後や入らぬ新酒五勺でも今賴む（越後茜句の歌）

どこ迄も現實的な國民であるといはなければならぬ。

自然物愛賞　「目に青い物を見るのは汁の實だけで」といふのは、町並木のない大都會の店頭に坐つてゐる者のいふことである。青天井の下に鋤鍬を手にして、疲れて仰げば雲雀は囀り雁は翔り、近くの林には啄木鳥が叫ぶ。俯して望めば一面の平野に帶をなして流れる絖のやうな河、それを下りて行く白帆、黃に咲く菜の花、靑毛氈なす麥畝、雪と見まがふ蕎麥の花、一たび四季の風物を賞觀することを學び得たわが日本民族は忽ち此の方面に眼をつけて、自然物を賞愛することに於て支那に對してまさに靑藍の譽を有するのである。芳賀博士は食物や衣服の色合や模樣や、家の紋や美人に對する比喩や、挿花盆景箱庭に例を取り、文學方面に於ては敍景文や俳句に就いて之を證し、隱遁者と稱する長明西行衆好等も世を遁れたとはいひ條、一生行脚をして花月を樂しんだと說かれたが、まことに其の通りである。

前にも述べたが如く靈地靈佛を巡拜するにも、信仰の念を述べずして、風景の美を諷ふ國民である。春の花見も貴賤上下の別なく行はれた。たゞ其の行樂に大小の懸隔があつただけである。一般民衆には文字がなかつたので、自然物の賞愛を文學よりは衣服の模樣や食物や植込の上に之を現はしてゐたのである。近く大震災後の東京郊外に於ける住居移轉

の模様を目撃して自分は今更に驚かされた。細民といはなければならぬ人の所有品全部は一臺の手曳車に程加減に積み得られた。いよ〳〵出發といふ時になつて、蓬頭亂髪の妻は牽き出さうとする夫を呼び止めて、之を忘れてゐたといつて載せたものは、底の拔けた鍋に、朝顔を植ゑたものであつた。其の蔓は疊せてゐた。幾つ花がつくか極めて覺束ないものであつたが、彼等は丁重に之を荷物の間に居いて、其の一葉をも損はないやうにと心掛けて行つた。考へて見れば此の心はわが國人全部の心なのである。都會では猫の額程の明き地にも必ず數本の木と數箇の石をあしらつて趣あらしめようとする。その明き地のない家込みの大通りでは飾り窓の狹い中にも一鉢二鉢の草花を置く、一段進めば卓上に鉢物を据ゑるのである。降つては三升一圓の米は買ひかねる人々でも植木の一鉢位は何かしら有つてゐる。まして見渡しの廣い野を控へて住む者は、あたりの景を取入れることに心を用ひる。客があれば障子を開いて其の景色を客への饗應にする。土地の賣買にも風景の有無は其の價を二三にし、東京近傍の如きは、富士山の見える處は、富士見とてそれが價を高める條件の一つに數へ立てられるのである。

村落の住民も亦自然を賞愛することに於ては、決して都會人に劣るものでなく、春の花、

秋の紅葉といふ因襲的なものでない。名も知らぬ野の草花にも見とれる、好風景に逢へば、あゝと叫んで、うつとりとして足を留めて眺め入る。秣刈る野に一本の百合があれば、彼等は之を刈取るに忍びず、それだけを殘すことを敢へてするのである。これが民謠の上に現はれない道理はなく、

向ふの小山の百合の花、よくも咲いたよゆら〳〵と（千葉縣、田植歌）

お寺の前の石榴花、咲亂れて御門の中で輝く（埼玉縣、麥打歌）

五月咲く花眞赤で大で桃色がかつた五色の色あり、アノけしの花（新潟縣、盆踊歌）

の類は各處に於て之を耳にし、之を人體の譬喩に取つた

樣の寢姿今朝こそ見たれ、五月野に咲く百合の花（諸國盆踊歌）

立てば芍藥坐れば牡丹、歩む姿は百合の花。

の如きものに至つては更に多くて、此の類の歌の謠はれない處は日本中に一箇處として無いであらう。

戀する薄はどこにある、富士の裾野にたんだ一本（山梨縣）

山で赤いのはつつじに椿、咲いてからまる藤の花（茨城縣）

潮來出島の眞菰の中で、あやめ咲くとはしほらしや（茨城縣）

などは人事にひきかけてあるが、其の自然物賞愛の念から生れたものたることは前者と何の異る所がないのである。

美景に對しては

吉野の山を雪かと見れば、雪ではあらで花の吹雪よの（糸竹初心集）

清見が浦で眺むれば、右に富士左は三保の松原（千葉縣、麥打歌）

松島の瑞巖寺程の寺もない、前は海うしろは茂る小松山（巖手縣）

の如き著名の勝地に關するものは固より、地方色を帶びた

平戸小瀬門から舟が三艘見ゆる、丸にやの字の帆が見ゆる（肥前）

米山眺むれば、今朝は煙か霞か、白雲棚引く面白さ（新潟縣、盆踊歌）

こんな歌は更に〳〵多く、野趣に富むものには、

めでたい物は芋の葉、葉長く、葉には黃金の露をもつヤレコラサッテハイー（千葉縣田植歌）

の類も決して尠くない。けれども民謠が自然の美を謳ふことに於ては到底俳句や着物の模

樣には追及し難い。民謠は元來何等かの勞作又は舞踊に伴ふことが多いので、活動を缺いてゐる風景や草木は、もと〳〵民謠に對しては好適の詩材でなかつたのである。

好笑　芳賀博士は以上の外樂天酒落以下の五性を擧げられたことは前述の如くであるが、自分は好笑といふ一性を擧げて、其の下に樂天酒落・淡白・溫和寬恕といふを攝取せしめようと思ふ。笑程一切を無難に解決するものはない。又樂天的でなく、酒落でない者に、笑を好む者はあり得さうに思はれない。笑つて濟ますのは恬淡な人に限る、笑ふ者に酷薄殘忍性の存することはかつて聽いたことはない。かの豐太閤などは其の好適例である。破倫に陷つた弟秀次以外の者には宏量大度を以て押通した。酒落淡白は此の英雄の一特色であつた。さうして此の英雄は實に笑を好む處の人であつた。曾呂利新左衛門を愛した爲にいふのではない、秀賴の代を限りに豐臣氏の滅びることを豫測して死んでいつた人である。思切りのよかつた人である。執着心の淡い人であつた。これは此の英雄ばかりではなく、日本國民に共通の性であつた。古來の史書・文學の上に續々として其の例證が見出される。天岩戸開きの時の天鈿女命の所業がすでに〳〵之を示して居る。竹取物語が之を示して居

る。狂歌や川柳の榮えたこと、童話に放屁譚や馬鹿婿の話の多いこと、いつの代にも地口や洒落の喜ばれたこと、此等は何れも皆其の好笑性に富むことを證するものといはなければならぬ。

神樂の早歌　民謡の上に現れた好笑性は古く神樂や催馬樂の歌に於て之を認め得る。

ヤ深山の小葛

ヤくれ〳〵小葛。

ヤ鷺の首取ろんと。　ヤいとはた長うて。

ヤ戸ふむな後なる子　ヤ我も目はあり先なる子。

ヤ舍人屎ぞ尻屎ぞ。　ヤわれも屎ぞ尻屎ぞ。

ヤ近衛の御門に巾子落いつ。　ヤ髮の根のなければ。

此は神樂の餘興に用ひた早歌の前半であるが、此に舞が伴つてゐて、此の意味を仕方にして見せたのである。恐らく見て笑はなかつた者は無かつたであらう。近衛の御門は御所の陽明門である。巾子がまだ作りつけにならぬ時代に、入道した者が還俗しての時、或は丸禿のものが、威儀を繕つて參内した時に、巾子を落して赤禿を露出したといふのである。

酒を食べて食べ醉うて、とうと轉んぞや。まうでくる。なよろほひそまうでくる。タンナ　タンナ　タリヤランナ　タリチリラ。

これは催馬樂の歌であるが、醉漢の大道を狹さうによろけて來るのを見て、子どもが囃し立てて謡つた童謡で、タンナタンナは笛の譜らしい。其の醉態は固よりをかしいが、當時の公卿達迄之を採用して、遊宴の席に之を謡つたとすれば、好笑は老幼上下を通じての性情であつたといはなければならぬ。

近代民謡の滑稽味　好笑の性情は室町時代の狂言に於て最もよく現はれて、諷刺と皮肉とから成るものを、大小名以下の武士たちが喜んで見たのである。下剋上の世相は此の中にも現れて、太郎冠者はいつも其の主人を翻弄するのであるが、此の中に作り込まれた小歌には滑稽味に富むものが多く、當代の民謡にはもつと〳〵此の方面に進んだものがあつた。

忍ぶ軒場に瓢簞は植ゑてな、おいてな這はせてならすな心のつれて、ひよ〳〵ら、ひよひよめくに。（閑吟集）

餘りの徒然に、〳〵、門に瓢簞つるして、折ふし風が吹いて來て、あなたへチヤツキ

リヒヨ、此方へチヤツキリヒヨ、ヒヨ〳〵ラ、ヒヨ〳〵瓢簞釣して面白やの。(小舞)

此の歌はひどく喜ばれて、ひやうたん節と稱へて元祿頃まで行はれた。

此の浮かれ氣質は、躍口說歌にもつと〳〵よく現はれた。萬治年中、友甫といふ人によつて謠ひ始められたものには、殊にそれが多い。

頭が禿げたエイコノ。實にや高きも卑しきも。昔も今も。つきせぬ物は。戀路の道よ。高麗唐の昔を聞けば。楊貴妃故に。ヤレ唐帝は蜀の國へ丹波越。めされた。吳王の夫差は。西施にほの字で。國と命に熨斗をば添へた。これは異國のヤレ事かとよ。扨吾が朝にては。久米の仙人通力自在のヤレ人なるが、物を洗へる女の脛の。白きを見るよりころりと落ちて。腰を拔かしたと。世間での取沙汰ぢや。かゝる例もヤレ多けれど。兎角人には情が先ぢや。小比丘尼が唄にも。見目がよいとて自慢はなしそ。人は情よヤレ振やいらぬ。小野の小町が花なりし身なれど。百年のお婆となりて。腰も屈まる目許は腐る。何より憂いのは額際からほんのくぼ迄の頭がエイ禿げたエイ。

笑を强ひる言葉遣はさう多くないが、滑稽とは紙一重の恬淡酒落が横溢してる居る。京は島原の廓に耽溺して、詰まるが習の廓の金に身の置所がなく、夜逃げをするを丹波越と

稱へたのである。玄宗帝の蒙塵をそれに見るなどは飽く迄、此の世を茶にして、笑つて過さう、浮いて渡らうといふ氣に富む人の作といふべく、これを承認して、一群幾十人の者が步調を合せ手拍子を揃へて踊つたとすれば、やはりそれが共通の性であつたと認めなければならぬ。此の類の歌はまだ〳〵ある。

錢もてござれエイコノ。さればこそとよ吉田の。兼好法師も。下戶ならぬこそ男はよけれと。徒然草に書かれた。又酒屋の主婦も。下戶ならぬこそ。女子はよけれと。通帳の奧に書かれた。下戶も上戶も。手に手を取りてコノ錢もてござれエイ。

笑話を謠ひ物にしたものも亦行はれた。日本のお伽話の過半は笑話であるが、それが子どもに喜ばれる許りでなく、成人も年寄も喜んで聞くのである。さうしてつひに、次のやうな歌になつた。

我等があたりに太郎介殿とて、おかも拔けんが、百の口がいかさま半分も拔けた人がござりたが、聞けば此の頃內儀を娶ばれたが、婿入案じてゐられたが、お內儀は發明な人で、婿入をなされたら、でご牛を見せらるゝであらう程に、先づ此のやうに褒めさせ給へと、さつても〳〵見事な牛かな、但馬牛さうなが、あめ牛さうな、田をば鋤

かしたら、朝飯に八反許りも働きやろと、此のやうに褒めさせ給へと教へける。
然らばやすき事ぢやとて、丹波を指して急がるゝ。舅の宿にもなりしかば、門のとほ
そをほと〳〵ひしやりほんと叩かるゝ。内の下男は大きな聲して、誰ぢやというたれ
ば、此の聲に驚きて、鼻をかくしてゐられけり。下男は通り者にて、扨ては都の花婿
樣かと、内へ伴ひ、さて盃も過ぎければ、舅の太夫の言はれしは、我等が祕藏の牛を
お目にかけんとて、牛部屋に伴へば、太郎介こゝぞと思案して、牛の側へそつと寄り、
さても〳〵見事な牛かな、但馬牛さうなが、田をば鋤かしたら、朝はらに八反計りも
働きやろと褒めければ、舅大きに喜びて、ついでに母の壽命にあやかり給へと、ちや
うど今年九十に餘るお婆が出られたりや、ついでにお婆も褒めんとて、婆の側につつ
と寄り、さても〳〵見事な婆かな、但馬婆さうな、あめ婆さうなが、田をば鋤かした
ら、朝はらに八反ばかりも働きやろと自慢顔して褒めにけり。お婆大きに驚きて、物
をもいはず婿殿顔を見上げ見下ろする目もとに汐がエ。
これも踊音頭の歌である。此等は音頭取が三味線や鼓や尺八等に合せて謠ひ、踊り手は
其の周りを手振面白く、時々は囃子詞を齊唱して巡つた時の歌である。こんな都會風なも

のでない、片田舍の廣場で、樂器もなければ、音頭取ち踊の輪の一人となつてゐた、うぶ
な鄕土藝に屬する盆踊の歌にも、
橋の擬寶珠を五兵衛かと思て、すでに言葉をかけうとしたが、さんしよくてこしよく
て見たら、いとこどしやら似て辛い。サンショノセー(陸奥)
色の黑いのを剛染に持てば、烏なくたび氣にかゝる(同)
わしはお多福自慢ぢやないが、こけて鼻打つ世話がない(兵庫)
の類は幾らも思ひ出せるであらう。子どの手毬歌にさへ
山寺の和尙さんは、毬はつきたし毬はなし。猫を紙袋へしこんで、ほんと突きやニ
ヤンと泣く。ボボンボンとつきやオニヤニヤがニヤンと泣く。ボンニヤン其處にか、
わしや此處に、さらば一貫貸しました。
と謠ひ近く明治に入つても
飲めや唄へや大阪の茶屋で、下戸の建てたる倉は無い(ヨサコイ節)
丸い頭へ水瓜をのせて、乘るか乘らぬかのせて見ろ(同)
思案半ばに空飛ぶ鳥はつれてのけとの辻占か。世の中陽氣にしやさんせ(ドツコイシ

ヨ節）

といふ歌はくりかへし〳〵様々の節で謠はれた。固より苦悶を述べて詩的情趣に富む處の歌は、こんな暢氣な歌よりも多く出てゐるが、それとても淡い惱、淋しい思ひといふ類で、おほむね淡泊瀟洒の性を現すのである。

言語上の戯 同音異義を利用して詩や劇の上に滑稽を弄するのは東洋人の特質らしく、殊にそれが日本に多いのである。古く古事記や風土記の地名の由來を物語るにも、これによつた物が多く、歌謠の上にも早くから

羽根なきとりの様かるは。炭取・掛取・かいもとり。石投取、虎杖垣生におふてふ拔薮（蔓草）や。弓とり筆とり、小弓の矢取りとか。

ふしの様かるは、木の節、萱の節、山葵のたての節、峯には山伏、谷には鹿の子臥、翁の美女婚りえぬひとり臥。

の如きものが雜藝の中に見えてゐる。此の戯は鎌倉時代の文學の上にも多く見出され、室町時代に及んでは、謠曲の上に、狂言の上に、また謠ひ物としては、當代の小歌の上に、

いとど名の立つ折りふしに、誰そや妻戸をきりぎりす（狂言の小歌）

身は破れ笠よなう、きもせでかけておかるゝ（閑吟集）

の如きものが多く見える。德川時代の泰平期に入つては、ます〳〵こんな機智を弄した口先ばかりの、引締りのない歌が謠はれた。

我は小鼓、殿はしらべよ、かはを隔てゝ喃、かはを隔てて寢にござる（三味線の組歌）

君と我とは框の糸のきれて離れて又結ぶ（同上）

忍ぶ細道に松と胡桃は植ゑまい。まつ夜に其の身がくるみでもなし。ナヨサテマコトニ來る身でもなし（同上）

の類、比較的に古いものから、江戸の中期にかけて行はれた諸國盆踊歌の中にも、

ひと夜なれ〳〵此の子が出來て、新茶々壺でこちや知らぬションガエ（周防）

月はかさなる腹の子はふとる、生木筏できが浮かぬ（伊豫）

婦人の身にとつては煩悶悩惱の最大因たるべきことに對しても、こんな洒落なことをいつて茶化してゐた。まして地口式の好笑氣分をそゝるものは所在に行はれて、

殿様出て見やれ、マアタ早出て見やれ、前の田の隅に喧嘩がござる。茄子と南瓜が喧

嘩を致す。南瓜からみつく、茄子はとげ立てる。隣畠の夕顔殿が、青い顔して取持に
遣入りやる。南瓜よく聞け、そなたは無理だ。茄子や胡椒畝(棟)持百姓、おらやお前
は九尺二間のコレ棚借りだとヤアレ(新潟縣盆踊歌)

いとし殿御に謎かけました。前の田中の三本杉に、鹿がねふしたが、解きやれや殿さ。
之を解くならほんまの殿さ。解かずば私に暇くりやれ。女童のかけたる謎、解くも恥
かし、解かぬもくやし。おれがやうなる大酒飲と、汝がやうなる潮垂れ女、みすぎか
ねたと解いて、ひまくれた(同上)

こんな類はいくらもある。勞作歌にも亦、

お前正宗わしや錆刀、おまへ切れてもわしや切れぬ。

の如きはいくらもあり、少し進んだ考へ落ちといふものには、

きいて怖いは辨慶橋よ、心やさしき地藏橋。

といふやうなのがあり、兩者の混合には

烏をば鷺と見るのも無理はない。一羽の烏でもにはとりと、あふひの花でも赤く咲
く。雪といふ字も墨で書く。

かういふ趣向に成る、內容には詩味の乏しいものが行はれた。數人寄れば、其の一人は地
口を弄するといふ國にあつては、こんな歌の行はれたのに何の不思議もない。さうかとい
つて私は決して沈鬱な、薄ぐらい、不透明な、寒氣だつやうな、そんな歌の無いのを遺憾
とするのではない。又血生臭い、煽動的な、殘忍な歌のないのを口惜しいとも何とも思ふ
のではない。寧ろ無いのを幸慶とするのである。轉じて民謠が最もよく反映する處の世相
に就いて述べる。

四　民謠と世相

世相の意義　世相は世の有樣の意である。制度・文物・俗習・流行等の一切を世相と見るべきであるが、假りに局限を附して、之を內的方面と外的方面の二に分ち、內的方面には主として倫理觀や宗敎觀を、外的方面には社會組織と經濟狀態とに關することを主にして略述を試み、次いで俗習や流行に關して民謠に據る史的考察をなすことにする。

宗敎觀を民謠の上に見出すことの出來ないことは前述の如くである。倫理觀に至つては忠君又は祖先崇拜の條下に說いたことが主要部をなすもので、他に多少實踐上の德行省慮に就いて謠つたもの、例へば

梅は匂よ木振りはいらぬ、人は心よ見目入らぬ。

世間渡らば豆腐で渡れ、まめで四角でやはらかで。

の類は無いでもないがそれは社會生活上より得た常識と解すべく、必ずしも儒敎的文化の發露と見るには及ぶまいと考へられるもののみである。かう見てゆく結果は、專ら外的方

面の社會組織や經濟情態に觸れた民謠の有無如何を檢して、史的論究を試るべきでことになる。

上古にあつては氏の上は其の氏の族に對する治者であり、天皇は皇族及び此の氏の上に對する治者で、此の兩治者だけが政治に當り、被治者は單に勞働に從事するのが職分であつたことは前述の如くであつた。民謠は此の被治者の間に湧く聲に他ならぬのである。けれども上古の歷史は、治者方面の行動だけに限られてゐるので、治者に關係のない民間の謠は記錄されなかつた。我が上古時代は、狩獵時代は通り過ぎて、もう立派な農業時代に入つて居つた。さうして、平群氏や大伴氏や蘇我氏の如き豪族は、土地の兼併に手を伸ばして、私有の民を驅使してゐたのである。貧富の懸隔が甚しく生じて、自然不平の聲は所在に揚つて居つたに相違ない。けれどもその聲は少しも記錄されてゐない。

苛歛と誅求　大化の改新は上古の氏族制を變じて郡縣制にしたものである。班田收授の法が行はれ、稅制が改められて、國司郡司が庶民を治め、それがすべて皆天皇に統率されることになつたのである。さうして奈良朝に入つては大陸文明を輸入して、帝都の規模

や百官の設置はます〳〵完備し、佛寺の建立は續々と行はれた。しかし此等は大陸の文化に醉つてゐた貴族連の好んで行つた處で、此の反面には勞役に追ひ使はれ、租稅を誅求されて、泣いて暮してゐた庶民のあつたことを忘れることは出來ない。

乞食者の歌　庶民の怨嗟は二つの長篇の歌として顯れた。それは萬葉集の十六の卷に載せてある乞食者の歌である。ほかひとは壽人で、おめでたいことを陳べて物を貰つて歩く者の謂であるが、それの歌に驚くべきものがあるのである。一は鹿の爲に、一は蟹の爲に痛を述べたものである。鹿の歌は四月五月の交に獵師が鹿の麻角(新しく出る角)が藥になるので、それを取つて朝廷へ差上げる爲に、片山の木蔭に鹿の來るのを待つてゐると、雄鹿が來て次のやうに歎いて聞かせたといふのである。

私は今死んで大君に御奉公することに致しません。私の角は御笠の飾りになります。私の耳は御墨壺、目は御鏡、爪は御弓の弭、毛は御筆になりますする。又皮は御手箱を張る革に、肉は御膾に、反芻は御鹽辛になりませう。年の寄つた私がさうもお役に立つとしたら、まあ大したことだといつて、死んだと、お上へ申し上げて下さいましよ。

蟹はまたかういふのである。

難波の浦に隱居してゐる私を大君がお召しになるといふことで。お召しになる譯は私もよく知つてゐましたさ。どうせ歌人として召すのでもなければ、笛引として召すのでもなく、琴彈に召すのでもないことは知れきつてゐましたが、とも角も仰を承らうと思ひまして、飛鳥の都へ參つて、東の中の御門から這入つて仰を承ると、これはまた驚かされた。

絆といふ物は馬にかけるもの、鼻繩は牛にかけるものだとばかり思つてゐましたのに、どうでせう私はそれに劣らないひどい目に逢はされましたよ。

片山へ行つて樅榆の辛い皮をどつさり剝いで來て、日にほしました。それを碓でつき、磨臼でつきました。それから又難波の海から潮を煮つめたのを持つて來、燒物師から瓶を取つて來ましたが、それから先は申さなくてもお分りでせう。私の目に鹽をぬりつけて、うまい〳〵と御賞味遊ばしますことさ。

これが怨嗟の聲でなくて何であらう。萬葉集卷の十九に壬申の亂の後の歌として、右大臣大伴御行の歌、

大君は神にしませば、赤駒の腹這ふ田居を都となしぬ。

を載せ、また作者不明の

大君は神にしませば　水鳥の集く水沼を都となしぬ。

の歌を載せてある。疑もなく天武天皇が飛鳥の淨見原へ都を遷されたのを偉業として讃歎したのであるが、此の都は持統天皇によつて飛鳥の藤原宮へ、それが元明天皇によつて奈良へ、それから三十年たつかたたないのに、恭仁の宮へ轉じ、四年にして難波に移り、其の翌年はまた奈良へといふが如くに帝都は移轉された。其の都度相當の苛斂誅求の行はれたことは考へなければならぬ。庶民は其の工事一切の勞役に服さなければならなかつたのである。こゝに

宮木曳く泉が杣に立つ民の、止む時もなく戀ひわたるかも（萬葉、十六、寄物述思）

といふ歌が現れた。宮木曳く民は實に休む隙がなかつたのである。老年者の如きは實に內に怨嗟の念を抱いて、此の鹿の如き、此の蟹の如き歌に共鳴したに相違ない。いや其の怨嗟が此の二首の歌となつて現れたに相違ない。史家は近時朝鮮を視察して、官省宮殿の堂堂たるに比して、民の家の藁葺屋根の見すぼらしいのに驚き、我が奈良朝は恐らくあんな

狀態であつたらうと說くが、恐らく處でなく、それ以上に懸隔があつたものと考へる。蟹の歌の如きは、難波に隱居してゐる者が、天武持統文武の飛鳥朝時代に呼出されて、朝夕粉骨碎身の勞役に從事しなければならなかつた時の歌と解すべく、鹿の歌は苛斂の苦に堪へない農民が、底に無限の悲痛を湛へての訴へ言と聽いてはじめて頷かれるのである。此の二首の如きは、恐らく奈良朝以前に於て何人かによつて謠ひ出されたのであらうが、歷代勞役收斂が引續くので、此の歌も引續いて謠はれたものと解すべきである。而して此の遷都なるものは、天皇の思召よりも政權掌握を企てる者の策としてであつたが、此の內情を探り得ては民衆に怨の聲が絕えなかつた筈である。

貴族の無謀諷刺　まだもつと〳〵民謠に貴族の無謀を諷したものがある。それは催馬樂に用ひられた澤田川の歌

澤田川　袖漬くばかり　淺けれど　（一段）
淺けれど　恭仁の宮人　高橋渡す　（二段）
アハレ　そこよしや　高橋渡す　（三段）

である。澤田川は山城の國の甕の原を分きて流れる泉川の支流で、恭仁宮は聖武天皇が天平十二年山城國相樂郡に地を相して設けられたものである。さうして此の高橋のことは續日本紀天平十四年八月乙酉の條に、

宮城より以南の大路、西の頭と甕の原宮の東との間に大橋を造らしむ。諸國の司に令して、國の大小に隨て、錢十貫以下一貫以上を輸せしめ、以て橋を造る用度に充つ。

とあつて、中々の大工事であつた。翌十五年十二月の條に又

初め平城の大極殿並に步廊を壞ちて、恭仁宮に遷し造る。玆に四年其の功繕に畢りぬ。用度費す所勝げて計ふべからず。是に至りて更に紫香樂宮を造る。仍て恭仁宮の造作を停む。

とある。さうして此の十月には、天下の富を有つ者は朕なり。天下の勢を有つ者は朕なり、といふ御趣意の下に彼の大佛殿建立の勅が出たのである。此の澤田川に渡した橋は竣成したかどうか史上に見えないが、此の骨を刺すやうな歌が出來て、後世に迄遺つたのであれば、支那に眞似て必要以上の大工事を起したことだけは否むことが出來ない。

此の歌は平安朝時代に入つて貴族連が遊宴の際外來樂曲に合せて謠つたが爲に「アハレ

そこよしや云々」と添加されたのであるが、吾人はこれに對してかなりな皮肉を感ぜずにはゐられない。そこには決してよいのではなかつたが、原意を知らずに謠つたのであらうか、それとも規箴とし謠つたのであらうか。何れにしても聖武天皇の偉業の裏、

白金の目貫の太刀をさげ佩きて、奈良の都をねるは誰が子ぞ（神樂歌）

と謠ふ反面には、此の高橋渡すの歌の謠はれたことは看過し得られないのである。奈良朝時代は實に公卿僧侶連が勝手な眞似をした時代で、心ある者はかの山上憶良の如くに庶民に同情せずにはゐられなかつたであらう。此の人の貧窮問答の歌を見よ、

天地は廣しといへど、吾が爲は狹くやなりぬる。日月は明しといへども、吾が爲は照りやたまはぬ。人皆か我のみや然る。わくらはに人とはあるを、人並にあれも生れを、綿もなき布肩衣の、海松の如わわけ下れる　襤褸のみ肩に打ちかけ、伏せ廬の曲げ廬の中に、直土に藁ときしきて、父母は枕の方に、妻子どもはあとべの方に、圍みゐて憂ひさまよひ、竈には煙ふき立てず、甑には蜘蛛の巣かけて、飯炊ぐことも忘れて、ぬえ鳥ののどよひをるに、いとのきて短き物を　端切るといへるが如く　笞とる里長が聲は　閨戸まで來たち喚ばひぬ。かくばかりすべなきものか　世の中の道。

何といふ悲痛な叫であらう。憶良は遣唐副使となつて彼土に渡つた學界の先進者、こんな貧しい生活をしたのではないが、多情多感な詩人たる彼は默視するに忍びないで、貧者弱者に同情して、此の絶唱を遺したのである。此の憶良に對しては、時人は尠からず感謝したことであらう。奈良朝時代には笞取る里長に稅を催促される庶民は所在に尠からずあつたのである。やはり萬葉集卷の十六にかういふ歌がある。

法師等が鬚の剃り杭、馬繋ぎ、いたくな牽きそ法師なけかむ。

これは法師がたび〳〵鬚をそるので、自然鬚が太くなる。それの延び始めはまるで馬を繋ぐ杭のやうに見えるといつて嘲つたのであるが、これに對して法師はかういつてゐる。

檀越や然な云ひそね、戸長等が課役責徵らば汝もなけかむ。

課役は夫役の意だが、それに宛てられてこき使はれたら、お前もなくだらう。わしは僧侶だから其の心配はないといつたのである。笞を振上げては稅を催促する外に、國に不似合な土木建築の工事に勞働を强ひられたのである。その苦しさを下層民が物に假りて謠ひ出したのが彼の鹿の歌であり蟹の歌でありしたのである。

世襲の弊　平安朝時代に入つては、藤原氏が政權を掌握し、末季には平氏が意のまゝ

に振舞つたので、平安朝時代なるものは上古の氏族制度に復つた姿であつた。かうなれば藤原氏の出なら、凡庸であつても要路に立ち、他姓の氣慨の無い者は阿附を事として、小計を弄しながら面從背反を常とする。すなはち腕次第といふ世ではなくなつた。催馬樂歌の

力なき蝦、力なき蝦。骨なき蚯蚓、骨なき蚯蚓。

は之を諷して餘蘊なきものはであるまいか。横柄面をして高い椅子に丸膨姿で蹲つてゐるが、さて實力はない處の蝦、公明を避けて、地下をもぐつて、めめしい泣言交りに人を中傷して、時々大切な作物の根に害を加へる骨のない蚯蚓、嗚呼此の蝦と蚯蚓の蔓ることは、平安朝と武家時代と今と更に擇ぶ處がない。無能にしてしかも權威を振はうとする徒輩、上に媚びて下を虐げ、自らは怠つて、働きは人に求め、師友を給いて苟も地位を得んとする鼠輩、此の如きの小人に取つては、實力者や硬骨漢ほど邪魔になる者はない。こゝに讒謗姦佞あらゆる策略は講ぜられて、正義に與する者は貶けられる。さうして之に代る者は力のない雨蝦、之を見て見ぬ振をする半ば干乾びた蚯蚓、世路辛くなるにつれて、ますますこれが增加する。働く者は埋められ、怠る者は用ひられる世程心許ないものはない。天に口なく人をしていはしめたのが此の歌であつたのである。其の天意を知らずして、之を

酒間に朗吟した遊惰公卿は、遂に政權を地下の武士に奪ひ去られてしまつたのである。

大官の專勢　當時京住居の大官連はさうなり行く運命とは知らや威福を恣にしてゐたのであつた。民謠の一種の風俗に、

鳴高しヤ　鳴高し。　大宮近くて鳴高し。アハレノ鳴高し。

といふ歌がある。聲をひそめ肩をすくめて、權臣の邸第に沿うて行く下層民の畏縮姿が目に浮ぶであらう。後世はこれに、

音なせそ　音なせそ。
あなかま、これはもや密なれ。

を添加して謠つた。（河海抄）大宮の皇居でなく、權臣の邸宅であることはこれで知られる。皇居の門衛はもつと寛大であつたに相違ない。此の畏縮姿はつい近年迄屢々目擊し遭遇した事實光景である。

元老罵倒　氏族政治にもやはり元老なるものはあつた。さうして元老なる者は、いつ迄も後進者を兒童視して、自分の老朽しつくした事を知らないことは古今同一轍であつた。やはり風俗に之を諷して、

鶴の羽根にヤレナ　霜降れりヤレナ　誰かさいふ　千鳥ぞさいふ　かやぐきぞさいふ　蒼鷺ぞ京より來てさいふ。

と謠つてゐる。思へば欣快の情に堪へない歌である。都をやゝ離れてゐて一國の政治に手を伸す鶴すなはち元勳が、老後毫髮して兒視する千鳥やかやぐきの手合に漸く輕侮される有樣をあり〳〵と目前に浮かばせるではないか。千年後迄も新しい生命を有してゐると稱へてやりたい歌である。

地方政治の頽廢　當時地方政治は一切國司任せであつた。其の國司には代官を遣つて徵稅や私有地增加の方法を講ぜしめる者が多かつた。さうして公租によつて私腹を肥やすことは今の中華民國の地方官の如くであつた。國司の廳の目や椽も出來るたけ誅求して懷を暖にした。

挿櫛は十餘り七つありしかど、武生の椽の朝に取り、夜さり取り、取りしかば挿櫛もなしや。サキンダチヤ（催馬樂）

は實に之を訴へてゐるのである。武生は越前の國府であるが、ひとり越前のみではなかつ

たことを信ずる。從來先哲は之を以て男女交接の數をいふものと解してゐるが、自分はそれに同意しかねるのである。

國司の富と驕奢とは都人にも驚きの目を見はらせた。其の北の方が成金振を發揮するを見ては、派手好の女、見目よき女を見ると、あれを國司の妻にしたらと世人は思つたものの如くである。

藥の御牧の時作り、　時はつくれど、娘の顏ぞよき。
あな美しやな。　あれを三車の四車の間行く
輦に打載せて、　受領の北の方といはせばや（神歌）

受領はすなはち國司である。地位はさう高くなく、今の府縣知事にあてはまるものであるが、其の收入は數等を超えて、市稅の高さと附加稅の過大なるとに呆れて轉任を希望する今の知事の如き者なんどは、當時日本國中をさがしても國司には一人も無かつたためであらう、自然大きに羨まれる地位で、

黃金の中山に　鶴と龜とは物語、
仙人童のみそかに立聞けば、殿は受領になり給ふ。（神歌）

と謠はれたのである。

土地兼併の弊　大寶令以後の土地公有の制は、當代に入つて事實の上にそれが廢されてしまつた。桓武の朝以後たび〳〵私に墾田を開發することを禁ぜられたが、政令は普及しないで、土地の兼併はます〳〵盛んに行はれた。國司までが他人の名義で私田をこしらへるといふ世になつた。權臣勢家は固より寺社までも競つて私領地をつくることに腐心した。此の私領地はすなはち莊園である。これが到る處に生じて、これ等からは一切租稅を納めないのであつた。地方の私曲に長けたものは、此等私領地の領主と結托して、其の所有の土地を寄附して、自ら其の管理者となり、法網をくぐつて利得は十分に收める者が多く、こゝに地方豪族なる者が生じ、國司や郡司にも土着する者が生じて、又々貧富の懸隔は甚しくなつた。可哀相なのはやはり庶民、庶民の中の最下層級であつつた。それでも口分田は何時しか私有地となつてゐたので、土地公有勵行（班田收授）時代よりは暮しよかつたであらうと思ふが、それがまた土地兼併の上には好都合なので、豪族はます〳〵其の所領を擴大して、こゝに地方を根據とする武士が生じ、今の地主對小作人關係も、早く此

處に生ずることになつた。

武士の擡頭　かうなれば下積みになつてゐる者は、起つて反抗するか惰けるかの二途あるのみで、起つても武士や豪族には手向ひが出來ず、遂に浮浪の民となつて賭博に耽る者もあり、化して盜賊となるもあり、藤原氏の力では之を押へきれなくなつて、武士はむくむくと頭を擡げたのである。さうして源氏は最も恐れられて、

鷲の住むみ山には　なべての鳥は住むものか。
同じき源氏と申せども、八幡太郎は恐ろしや。

と謠はれた。隨つて其の生活も豪奢で

上馬の多かる御館かな。武者の館とぞ覺えたる。
咒師の小咒師のかた踊　禰宜ははかたの男巫。

上馬は疳高の逸物をいふ。咒師は咒師猿樂を演ずる者で、僧體をなすもの、小咒師は後の能樂の子方に當る者で、當時其の舞よりも容姿を愛する者が多かつたのである。男巫は女巫が白拍子のやうな舞をなすに對して、多少勇ましい男性的な伎を演じたのであらう。はかたは原本にくかたの如くに見えるといへば、陸奥方の意ではないかと思ふ。此の歌は雜藝

の神歌の一つであるが、同じくそれの神社歌の中に

東には女はなきか男巫、さればやかみの男にはつく。

といふのがある。

ひとり都のみでなく所在に武士が割據して、氏の神は固より其のあたりに近い靈驗いやちこの神を軍神として崇めるに至つた。武は關東人の特長であつたが、武人の蟠踞は四國にも九州にも山陰山陽の中國地方にも亘つてゐた。自然軍神なるものは各地に點在した。神歌には之を列擧してかう謠つてゐる。

關より東の軍神　鹿島香取諏訪の宮　又比良の宮
阿波の洲、瀧の口や　小□□熱田に八劍、伊勢には多度の宮」
關より西なる軍神　一品中山安藝なる嚴島
備中なる吉備津宮　播磨に廣峰惣三所
淡路の岩屋に住吉西の宮」

當時公卿連の手におへない者は武士だけでなく、南都北嶺に立籠る幾千の僧どもであつた。少しでも願意が通らなければ、南都興福寺の惡僧どもは春日の神木を、北嶺比叡山の辨

慶式の不覺僧どもは山王七社の輿を奉じて傲訴するのであつた。神木神輿には攝關以下が恐れをなして、結局はいつも其の願は聽き入れられた。僧どもは得意の日を送つた。驕奢は武士に超越してゐた。此のことは、物語や記錄の上に見えてゐる。それでも、其の騎乘姿はひどく京童の目に不快に感じたかして

婆婆にゆゝしく憎きもの、　法師のあせる上馬に乘りて、　風吹けば口あきて。……

と謠つて、之を白頭翁の若妻好と尼姿の姑の嫉妬とに並べて擧げてゐる。兼好法師の徒然草にも法師の上馬に乘つて口をあけて行くのを嫌つて書いてゐるが、それは此の歌に導かれてのことだと思ふ。

賭博の流行　賭博を好むのは人間の本能であらうか、それでなくても農耕以前の狩獵時代に得物はあるか無いかに就いて、投機的な行動をなすべく、之を同類の人間に對して挑めば、それが乃ち賭博である。我が國の賭博は雙六の輸入後に勃興したらしい。盛んに行はれたのは平安朝時代に入つてからである。催馬樂の大芹は之を謠つたもの。降つて雜藝には幾首かあつて、中には、

我が子は二十に成りぬらん、ばくちしてこそ歩りくなれ、國々の博徒に。さすがに子

なれば憎かなし。負い給ふな。吾氏の住吉西の宮」

嫗の子供の有樣は。冠者は博奕の打負けや。勝つ世なし。

禪師はまだきに夜行好むめり。姫が心のしどけなければいとわびし」

こんな歌も見えてゐる。

生活の不安定　世は物騷になつて、長刀持たぬ尼はなくなつた(雜藝)。又たつた二人子のうち、一人の女の子は、二位中將の厨の雜仕(下女)に差上げ、一人の男の子は宇佐の大宮司の舟子に差上げた。神も佛も御覽じないのか。何でこんな困厄に逢はせ給ふぞと怨んだ歌もあり、十幾つになつた娘が巫女、實は賣淫をして歩いてゐるが、田子浦あたりでは、海人にどんなになぶられてゐることだらうと案じる歌もある。こんな歎の聲が都鄙の庶民の間に溢れてゐた。其の上地方豪族の擴勢は遂に貴紳連を脅した。僧侶輩は租稅といふものには關係がないので、壓迫といふことは知らずに非學非修勝手な眞似をした。世は全く不安定の狀態におかれたのである。かうなれば人間以上のものに依賴することになる。飽く迄も現實的なわが國民は、來世に望を繫けて、淨土往生を願はないではないが、それよりも現世利益を希つて、其の願の下に諸處の靈社靈佛へ參拜することが盛んに行

はれた。熊野詣は法皇も大臣も武士も皆缺くべからざるものとして考へた。それが嶮難の地を踏まなければならなかつたので、紀路と伊勢路とどれが近いかといふやうな歌も謠はれた。都附近では貴布禰・清水・法輪・根本中堂等へ詣でる者が多かつた。それが靈驗所歌となつて謠はれた（梁塵祕抄）西國巡禮も四國遍路も、山伏の金峰山上りも羽黑山登りも行はれてゐて、それが當代の謠ひ物に現はれてゐる。

封建制度の發現　此の不安定な平安朝後半期の社會狀態から脱して安定を得ようとする要求から、次の鎌倉室町江戸の三幕府を通ずる封建制度時代が現れたのである。本庄榮治郎博士は其の著日本社會史に、

西洋の封建制度が羅馬大帝國滅亡前後の動亂を經て起り、我が國に於ては王朝の末に於ける都鄙の隔絶、地方擾亂の時代を經て、封建制度の萠芽を發し、戰國時代の後安定なる德川時代を現出した。

と述べられた。まさに此の說の如くである。

封建制度には階級と主從關係とは嚴存してゐたものである。すなはち所在に一定の土地

を占有して其の封土人民を統治する者があり、其の下に臣下として生業を營むものがあつた。さうして其の統治者は諸大名（諸侯）だが、其の大名は國の主權者（將軍）に統一されるのが本體である。鎌倉時代を經て室町時代に入つては、下の者が上を凌ぐ、所謂下剋上の世となつて、これがやがて小諸侯の多く出現する所以であつた。さうして封建制は織田豐臣時代から整ひ始めて、德川氏の世になつて完成したものであつた。鎌倉時代あたりは本庄博士のいはれた如く、封建萠芽時代となすべきであつたのである。

武家時代の庶民　封建時代にあつても、民謠はやはり被治者たる民衆の間に湧き出づることは王朝郡縣制時代と更に異ることはない。けれども封土領域が小さく限られてゐるので、彼等は直接に其の領主たる殿と休戚を共にすることになつて、

今年や世がよて穗に穗が咲いて、殿も百姓もうれしかろ。

と謠つた。稻作の豐凶には殿と百姓とが其の苦樂を同じうしたのであつた。賢明なる領主は百姓を疲れさせないことに心がけたが、通じては武士は社會の中心で儀表たるべきもの、町人や百姓は此の侍を養ふ爲に纔かに其の生存を許されてゐるが如きものであつた。……幕府は農民に對して奢侈を禁じ粗食を强ひ、衣服は木綿物に限り、不似合なる家宅を作

ることを禁じ、嫁とりなどにも乘物を無用とし（日本社會史）一切の行樂の上にも制限を加へた。けれども根が淡白な溫和なわが民衆は餘程の苛歛に逢はなければ、暴動や一揆は起さず、隨分忍び難い事までも忍んでゐたのであつた。但し幾分なりとも上納や勞役を少くしたいといふのは人の情で、

オロシヤ船は　千艘來とままよ　土屋長三郎さんが　來にやよかろ（越後の歌）

と謠つてはゐる。土屋は文化年中海防準備の奉行を務めた男である。又陸奥の田植歌には

笠や足袋はどもかうもせうが、配符の二俵はちんばかな。

といふのがあつた。ちんばは氣の毒の意で、二俵の年貢には困りぬくの意だといふ。

各地にこんな歌は多く出たのであらうが、諸國の盆踊歌や勞作歌を通觀した處では、火を噴くやうな歌は少しもなく。此の程度の歌にしても尠く、泣く子と地頭には勝たれないとあきらめてゐたらしい。

但泰平が續くと共に武力よりは金力の世となつて、武士も町人には頭が上らなくなつた。「大阪の富豪一たび怒れば、天下の諸侯皆慄へ上る」と蒲生君平が言つたといふが、それは事實であつた。關西の諸侯で大阪の富豪から借金してゐないもののなかつたことは淀屋の

沒落を記した元正間記の記事だけでも詳かに知られるのである。江戸では又藏前の札差に俸米を抵當として前借をするので、旗本の士人もそれには頭が上らなかつたのであつた。

勞働の緣忌　元來町人は稅が高くなれば品物を高く賣つて行くといふ好都合の下に生活するので、農民程は困厄の境遇にはゐなかつたのである。そこで町人生活を慕つて都會へ集沖するの風は早く江戸時代に起つて、

江戸へ〳〵と木草もなびく、江戸にや花咲く實もなりて（盆踊歌、備後）

といふに至り、農民には勞作を厭ふの弊は生じてゐたのである。さうして貧富の懸隔も甚しく、地主と小作人の間にも抗爭は起きようとしてゐた。

七つ下りて田の草取れば、野菜の露かや涙かや（盆踊歌）
腰の痛さや千町田の長さ、四月五月の日の長さ（田草取歌）
今の田の田主の息子はまで寢てか、窓からお日がさすまでも（神奈川縣）
今日の田の田主の家では米は何、三年米を御藏から（同）
今日の田の田主殿の嫁はどれがそよ、錦の小袖綾の帶（同）
寺の婆、名主の嬶も褌かけやれ秋三月（越後）

麥打はらくだと見せてらくでない。何仕事、仕事にらくがあらばこそ（岩手縣、麥打歌）

五月が來れば怨めしや、日はくれる仕事は富士の山程（埼玉縣、麥打歌）

今年やこゝで麥を打つ、また來年はどこで打つやら（同）

おてんと樣の申し子で、六月のひでり笠もかぶらずに（千葉縣、麥打歌）

と勞働を厭ひ、地主の富貴をのろひ、更に一段進んでは

金が咸光の太平顏も昨日限りの三途川（盆踊歌、伯耆）

と謠つた。これが募つて暴力に訴へたのは打壞しと、暴動とだけで、これは逆上した時、平常はどこ迄も洒落で、

うんと蹈張れ田の中へ、隣の娘が水鏡（東京府）

都習ひかお國の作法か、姉が妹の酌に立つ。（同）

色の黑いのに白粉つけて、お母見てくれつるし柿（大阪）

などと謠つてゐた。時に輕快陽氣の域を通り越して、失笑を禁じ得ないものの多く謠はれたことも人々の知れる如くで、現實的な樂天的な國民性は、よくこの上に反映して居る。

總じて庶民は働いてお上への御奉公を缺かないやうにと思つてゐたのであつた。これといふのも同一民族、同一言語、同一祖先といふ考が庶民全體の血の中に通つてゐた結果で、國土や氣候や食物などの關係も幾分參與してゐたものと考定すべきであらう。

俗習の反映　以上は專ら社會狀態や經濟關係の上から見て例を拾つて說明を試みたのであるが、他に習俗流行等に關して、普通史書の上に見られないものが民謠の上に謠ひ出されてゐる。勿論民謠以外の和歌や物語の上にも現はれてゐるのであるが、曲節を附けて諷謠されただけに、人の心を動かしたことが多く且つ强かつたものとしなければならぬ。上代は暫く措くとして、外來文化崇拜時代たる奈良朝に出た萬葉集中、慥に謠はれたと認められる部分に就いて見れば、

眉根搔き、はなび紐とけ待てりやも、何時しか見むと思へるわが君（卷十二、正述心緒歌）

言靈の八十の衢に夕占とふ、占まさにのれ妹に逢はむよし（同上）

眉根の痒きと、くしやみと、帶の自ら解けるのとは、待つ人にあふ吉兆として信ぜられたのである。恐らく上古以來のことであらう、今もまだそれが諺にも殘り、一部の人には信ぜ

られてもゐるのである。夕占は日の暮方に辻に立つて、道行く人の語る言葉によつて吉凶を占ふことで、今も行はれる辻占の起りである。「淡路島通ふ千鳥」の愴婉な調べは東京には絶えたやうだが、舊慣の保存される廢市は物の音の鎭まりそめし狹斜の巷には夜毎に聞き得ることであらう。當時又足占も行はれた。或物を目標に定め、それに達する迄の歩數の奇偶によつて吉凶を定めるの法で、これも正述心緒歌の中に

月夜よみ、門に出で立ち足占して。往く時さへや妹に逢はざらむ。

とあり、他にもまだ一首見えてゐる。今行はれる疊算は此の餘風で、「ぬしを松葉の簪おいて近江表の疊算」などといへば、ひどく古いものに考へられようが、明治に入つても行はれてゐたのである。又餘りに人の戀しい時には、着物を裏がへしにして着て寢れば、夢の中に其の人に逢ふと信ぜられた。それが同じく、

吾妹子に戀ひて術なみ、白拷の袖反し夜の夢に見えきや。

と同じ部に見え、又逢ふ迄は人に釋かすなと互に對手の下紐を結ぶのが習はしで、

海石榴市の八十の衢に立剛らし、結びし紐を解かまく惜しも。

海石榴市は大和の山邊郡にあつて、古く歌垣の立つた所である。歌垣は東國地方で嬥歌と

稱へたものである。一定の時凡そ年々春秋二季に、男女が求婚逞戀の爲に集つて歌ひかはしたことの謂で、盆踊は其の餘風である。武烈天皇がまだ太子であつた時代に、鮪の臣と物部麁鹿火の娘影媛を此の海石榴市の歌垣で爭はれたことがある。歌垣は各地方に行はれたが、常陸の筑波山、肥前の杵島岳が此の海石榴市と共に名高い處であつた。さうして筑波山の嬥歌のことは萬葉集に長歌となつて「いざなひて少女男の、往き集ひかゞふ嬥歌に人妻に我もまじらむ　わが妻に　人もこと問へ　此の山を　領く神の始めより　いさぬぬ業ぞ……」と出てゐるが、海石榴市にも其の風がかなり後迄遺存してゐたのではあるまいか。大和物語に「中頃はよき人々市に往きてなん色好むわざはしける」とあるのは遊女を相手にするの意だが、前の歌は歌垣の時に結び合つた下紐のことであらうと思ふ。下紐に關しては他に、

二人して結びし紐を、一人して我はとき見じ、直に逢ふ迄は。

故もなくわが下紐ぞ解けしむる、人に知らゆな直に逢ふ迄。

といつたやうな歌は幾つもある。

肥人の額髮結へる染木綿の染めし心は我忘れめや。

隼人の名に負ふ夜聲いちじろく君が名のらせ夫と賴まむ。

此等は異風奇習を傳へるもので、前者は肥前肥後地方の人が前髪を赤い布片で結び止めるたのが人目をひいた爲で、後者は薩摩隼人が門衛の役を奉じて夜を警める聲の如く、はつきり自分の名を仰つしやい、さうしたら夫にもちませうの意、上古以來先づ男から其の家と名とを名告つて、いひよるのが慣例であつた。萬葉集卷頭の雄略天皇の御製にも「我こそは夫とは名告らめ家をも名をも」とある。

中古時代の反映　後代から見れば珍らしい習俗は擧け來れば際限がない。然るに流行に就いてはさう多くを見出さない。元來流行なるものは人類の本能たる模倣性に基くもので、それが社會的に大がかりに現はれたものをさして、我等はかう呼ぶのである。服飾結髪等の上に最もよく現はれるけれど、一切明瞭な理由の下に行はれるのでない。衞生上に根據があるでもなく、體軀や皮膚の色との調和の上に成立してゐるのでもない。此のことは、現代婦人の衣服や結髪の樣を見ても推及し得るであらう。隨つて時々に變遷して、本年の流行は昨年の流行でなく、又來年も流行するとは限らないのである。自然之を詠じた歌の諷謠され歡迎される期間は短く、ひいて記錄される機會は尠かつた筈で、到底繪卷

物や物語の上程には世相が現れて居ないのである。

上代の歌は傳來が尠く、流行はそれの上に窺はれさうにもない。奈良朝以降の二百年間は大陸文化心醉の時代であるが、民謠の上にはこれに關するものがない。全く庶民階級は前述の如く國政に參與することがなく、概ね無智文盲で、勞働に從事して租稅だけを納めてゐたのである。著しい例を假想していへば、貴族社會には、楊貴妃の風貌を遣唐使から誇大的に傳へられ、豐麗濃艶な姿態を想望して、見ぬ戀にあくがれた手あひもあらう。聖武天皇時代は彼の玄宗皇帝時代に當り、楊氏の女大眞が貴妃となつたのはわが大佛の出來た翌々年である。美人に對する好みは、この風聞によつて一變したに相違ないと思ふが、むしろ螺蠃(蜂の一種、似我蜂)少女といつて柳腰式の美人の方が歌の中に現れてゐる。

奈良朝の初年は、明治の初年に一切を擧げて洋風を模したと少しも異らなかつたであらう。さうしてそれは眞似易い服飾から始まつたものと見える。白金の目貫の太刀を佩びることの至り姿であつたことは、かの歌によつても判ぜられよう。小さな物では巾着を下げることも亦目をひいたか、

庭に生ふる辛蓼はよき菜なり、宮人の下ぐる袋をおのれかけたり(催馬樂)

と謠はれた。これも奈良朝に謠はれたもので、此の類はもつと〳〵あつたに違ひないが、慥に當代の歌とすべきものの中には、さう多くは見出せない。

歸化人との觸接　平安朝時代の下層社會の生活は文學の上に詳記されてゐない。かの賭博の外に遊女が所在にあつたことや、外國から移住した者との觸接や其の時代の流行等に就いて、多少なりとも催馬樂や神樂の歌及び雜藝が當代遠望の篝火となつてくれることを喜ばなければならぬ。

石川の高麗人に　帶を取られて辛き悔する。
いかんなる帶ぞ。　縹の帶の中は絶えたる。
カヤルカアヤルカ中は絶えたるか。（催馬樂、石川）

河内の石川郡にゐる高麗からの歸化人に帶を取られて、ひどい目に逢つたと女がいふ、どんな帶かと年配の男が面白さうに尋ねる、當世流行の縹色の帶だが、餘り強く引かれて、中からふつりと切れたと女がいへば、帶だけならいゝが、二人の中迄切れやしないかと男が揶揄ふのである。朝鮮人はわが大和民族と同系であつただけに、馴染易かつたものか、

他にまだある。

設樂高麗人の單の狩衣、な取入れそ、いとねたし。
な取入れそ、小雨にそぼぬらせ、夜離するいと〳〵ねたし。（神樂、蟲）

設樂は手を拍つて踊ることであれば、高麗から來た踊上手の藝人が、かゝり合つた女の處へ御無沙汰をしたのを憤つて、女がかういつたのである。今も田舍では馬の脚や前座語りに逆上せる女があれば、此の道ばかりは古今同一徹といふべきであらう。先年ジョンベールといふ混血兒の寄席藝人が居つたが、此の歌を見ると、此の藝人の下手な追分節を過賞した手合のことを思ひ出さずにはゐられない。

高麗は必ずしも三韓の一をさしていふのでない。三韓樂を高麗樂といふの類で、高麗人は今いふ鮮人の意であつたのである。當時鮮人は所在に歸化してゐた。前に引いた山城の狛のわたりの瓜作り云々の歌は、相樂郡の上狛や下狛に住んでゐた鮮人が、內地人の娘に結婚を申込んだ時の歌だと自分は思ふ。

遊女の邇狂　漢人に關する民謠は尠いが絶無といふではない。先哲はこんな事は更に

考へても見なかつたやうだ。催馬樂歌の

大宮の西の小路にあやめこんだり、さやめこんだりタリヤリタンナ

をも、あやめは菖蒲と解して、こんだりの解に苦しんでゐたのである。自分はあやめは漢女で、こんだりは子産んだりであると思ふ。歸化漢人が子を産むに何の不思議はなく、之を謠ふには及ばないのであるが、其の漢女は只者でなく遊女であつた、それが子を産んだので評判になつたとかう考へたい。遊女であつたことは文永年中に出來た文机談といふ書に、

古き頌に西の小路にあやめ子産みたり、ゑんてう筋艶めいたり、何とかやいふことを……

とあるので明かだと思ふ。西の京が當時遊女の巣窟であつたことは、

西の京行けば、雀はぐろめつつ鳥や、さこそ聞け。色好みの多かる世なれば。人は響むとも麿だに響まずば。（神歌）

男怖ぢせぬ人、賀茂女伊豫女上總女、はししあかてるなえの（本ノママ）筋の人、室町わたりのあこう人（同上）

の歌でも知られよう。雀はぐろめは浮かれ男の騷ぐ有樣、次の歌のあこは吾子で、やはり遊女、彼の景清の關係した女のあこ王、淨瑠璃ではあこや御前となつてゐるが、それが遊女であつたことは幸若舞曲の景清にも見えて居り、遊女を子どもと呼ぶことは今も地方に保存されてゐる。同じ雜藝の歌の

東より昨日來たれば妻も有たず。此の着たる紺の狩襖に女易へ給べ。

の女も遊女であらうと思ふ。大江匡房の遊女記には專ら扁舟に掉さした、淀や江口や神崎あたりの浮かれ女を敍してあるが、遊行娼婦も古くからあり、京洛の中には定住區劃が自ら定まることは、後の江戸時代を待たなかつたのである。西の京室町筋は實にそれであつたと考へられる。又前記の歌に賀茂女とあれば、賀茂の社附近にも當時遊女が居たのであらう。それに並べて上總女や伊豫女の擧げてあるのも面白い。思へば「上總女に情がない」の諺は、由來が隨分遠いものといはなければならぬ。伊豫は道後の温泉によつて、かういはれたか。當時まだ湯女はあるまいが、情を賣るものはあつたに相違ない。人の集まる處にそれの緊要なことは昔も今にかはる筈がない。それにしても海沿の上總と伊豫と特に擧げられたのは、まさかに海賊關係でもあるまいが、何れ此の兩國の女が京都へ入り込んで

ゐたことは今新潟縣や廣島縣の女が多く東京に來てゐると同樣であつたものと考へなければならぬ。

流行の服飾　平安朝中期以降の流行はやはり雜藝の歌によつて多少は窺はれる。服飾關係には、

婿の冠者の君、何色の何摺か好う給う着ま欲しき。
麴塵山吹とめ摺に、花村濃。皆柏や、龍膽と違笹、結び纈纈、前垂の寄生樹の鹿子結。

がある。これによつて黃の勝つた萌黃や、山吹色が若い者に喜ばれたことを知るべく、世に行はれた模樣が何であつたかも知られるのである。纈纈は古く東大寺の正倉院の藏にも見えてゐるが、ことに鹿の子絞がうけたことは此の歌で知られる。德川の初世に「今宵も鹿の子、あすの夜も鹿の子、めしかへざされ」といふ踊歌もあり「吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振袖が」とも謠はれた。明治大正年代にあつても、高山植物模樣、埃及模樣、印度更紗模樣の喜ばれる間に、いつも鹿の子絞りは頭を擡げるのである。極めて國民趣味に合致するものといふべきであらう。

此の頃都にはやるもの、肩當腰當烏帽子止め、襟の立つ片皺烏帽子、布打の下の袴、四幅の指貫。

は餘りに細かな事で、繪卷物にでも例證を求めなければ說明が出來さうもない。もう一首此の頃都にはやるもの、わうたいかみ〳〵（本ノママ）似非髻、しほゆき近江女女冠者、長刀持たぬ尼ぞなき。

傳本に訛誤があつて、意味がよく取れないが、最後の一句に物騷な世であつたことだけは分る。自然武士が幅を利かした時世であるが、其の武士の好みは、

武者の好む物、紺よ紅、山吹、濃き蘇芳、茜寄生樹の摺、よき弓胡籙馬鞍太刀腰刀、鎧冑に脇楯籠手具して。

と謠つてゐた。武裝の堅固以上に、見た目にくつきりと映ずる服色が喜ばれたことが知られる。

前にもいふが如く不安定な世であつた。尼迄が長刀を持つ時代であつた。南都北嶺の惡僧どもが持て餘される時代であつたが、其の反面には戒行嚴修の淸僧もあつて、

聖の好む物、比良の山をこそ搜ぬなれ弟子やりて。松茸平茸なめ薄、さては池に宿る

蓮の這根芹根、蓴菜午蒡河骨打蕨土筆。

とも謠はれた。平穏な日を送る者が固より多くて、後世の我等が忖度して論ずる程に時人は不安定を感じてゐなかつたのである。

海老すくひ踊と阿呆陀羅經　戰亂の世にも樂天的なこと談諧にわたることは謠はれる。それが兎も角も表面だけでも平靜な平安朝時代である。暢氣な陽氣な謠の出ない道理はない。

海老漉舍人は何處へぞ。雜魚漉舍人がり行くぞかし。此の江に海老なし、下りられよ、あの海老雜魚の散らぬ間に。

聞くにをかしき經讀みは、とうかく高砂の明泉房、江口のふぢに、たのやけの君（本ノママ）淀には大君次郎君。

の類まだ〳〵ある。前の歌には、今の泥鰌すくひ踊が、八百年も前に海老すくひ踊として行はれてゐたことが想像されるであらう。又後の歌のをかしき經には今の阿呆陀羅經の類であつたことが想像される。

女の婚期　右の外、物語類の記事に對して裏書をするものには、

冠者は妻設けに來にけるは。構へて二夜は寢にけるは。三夜といふ夜の夜半ばかりの曉に、袴取りして逃げけるは。

がある。當時妻を定めるには、まづ男から文で女の許へいひやり、一夜寢て歸つて後朝の文をやり、二夜目にも訪ね、三度目に夜が明けてから、所あらはしといつて、女の父母や家族に對面するのが例であつた。其の三夜目の曉に逃げてしまつて、全く女が翻弄されたことを謠つたのである。若殿上人の如きは到る處で之を行つた。其の風は身分の低い者に迄及んで、さうして此の歌は生れたのである。さて其の婚期の女子はそも〳〵何歳位であつたのであらう。

女の盛りなるは十四五六歳、二十三四とか、三十四五にしなりぬれば、紅葉の下葉に異らず。

の歌が之を語つてゐる。清少納言の奉仕した一條天皇の皇后定子は十四歳で入内された。光源氏の嫡妻葵の上は十六歳で源氏の君と結婚した。紫式部や和泉式部たちも何れ此の年配で夫をもつたことであらう。女盛りの期間は先づ十年、せい〳〵子どもを二人か三人產

む迄の間である。成程二十三四迄で、三十四五になつては、末枯れ果てた落葉同樣に考へられたであらう。其の後とても多少の出入は勿論あつても、女の婚期を十六七歳から二十迄位に考へることはつい近年迄の事であつた。現代こそ婦人の自覺の下に、學問技藝修得の爲に、獨立生活考慮の下に、紅葉の下葉頃に初婚をなす人達もあるが、其の代りには四十歳になつても厚化粧の派手づくり姿は、汽車電車の內といはず、隨分手堅い家庭に於ても見られるのである。之を何と評すべきか、自分は適當な語を見出し得ない。まあ一切が十年後らせられたと考へたら、恐らく一番穩健であらう。但し生命が十年向ふへ延長されてゐないことだけは事實で、自分はこれに對して切實に同情し且つ沈思するのである。さうして婚期の後れること、自立の後れる事は女子のみに止まらず、男子とても同樣であることを思へば、結局は死ぬ迄働くといふことを主義としなければならぬ。「あの人は仕合せな、まだ五十そこ〳〵だが、孫の守りをして」といふことは都鄙を通じて絕えた。此の生涯勞働といふ主義は、宇內を通じて競爭激甚な當代に處する唯一の方策で、此の方策は、生命の十年延長の不可能を補つて餘りあるであらう。

もう一つ考へさせられる歌が雜藝の中に出てゐる。曰く

見るに心の澄むものは、社毀れて禰宜もなく、祝無き、野中の堂の破れたる。子生まぬ式部の老の果。

この心の澄むのはさつぱりとするといふよりは澄み過ぎてゐるのである。すごい凄じい、荒涼といふ語でも當てはめたい處の荒廢神社の光景に對していつた言葉である。これと並べて擧げてある子の無い式部の老後の樣は、當今流行の凉しさうにしてゐるのではない、寒さうにしてる。淋しさうだ、張合が無ささうだといふ方に解すべきであらう。淸少納言の晩年は實にそれであつた。生來の勝氣は、若者どもの輕侮に對して「死馬の骨を五百金に買はずや」と反駁して、永遠に遺る枕草子の著述を成し遂げたのであるが、他におきやん納言や多情式部の晩年に甚だ憐むべき子無しの式部があつて、此の歌となつたのであらう。式部は元來宮仕をする婦人の呼名に附けた接尾語といつたやうなものであるが、それが獨立して終に其の種類の婦人に對する代名詞となつたのである。後の德川時代にも御殿奉公から下つた者には、子を產まない者が多かつたといふ、理由はこれと違はうが平安朝時代の宮仕者は何れも不產の原因となす處の博愛主義者であつたことは事實である。儒教の訓戒が一般道德の標準となつた後世の眼から見るとは違つて、當時はそれを左程亂倫敗

德とは思はなかつたであらう。しかし目に文字はあり、戀愛自由論者であり又相當の實行者であり、尠くとも一般の者とは行き方を異にするものに對して式部といふ名は附せられたのである。之を思ふと明治の中年から通用語となつた海老茶式部なんどは何もさう新しい語として考へなくてもよい。

閑吟集と習俗　傳本はもう無いものとあきらめてゐた梁塵祕抄の一部分が故村岡良弼氏の藏書の中から出て、和田英松博士の手に入り、佐々木信綱博士の校訂の下に刊行されて、こゝに雜藝といつた類の謠ひ物の正體が明かになつた。平安朝後半時代の一面を語るものとして珍重すべきは前述の中に頻繁に引用したのでもわかるであらう。然るに次の武家時代に入つては民謠の類聚は行はれず、室町幕府の後半時代に入つて僅に閑吟集が出ただけである。其の代りに此の期間は繪卷物が續々描き出されて、此の上に習俗流行信仰異變等が仔細に寫し出された。低級ながらも劇が成立して、此等の事は此の上にも作り入れられた。書留や日記の上にもほつ〳〵錄せられた。隨つて史料は漸々豐富になつたが、庶民は政治に參與せず、目に一丁字も無いが當り前の世であつたから、民謠はどこにも書留められてゐない。閑吟集の外には能の謠曲や狂言の中に搜ねて四五十首が得られるだけ

である。

閑吟集には詩經にならつて三百首許り輯めてある。尺八ずきの坊さんの手に成つたので、やはり朗詠風の句や謠曲の一部、今の小謠の類が過半を占めて、眞の民謠と見るべきは其の四五分の一、五六十首そこ〳〵である。到底梁塵祕抄の足許にも寄れるものでない。それでも當時の流行を知るべき、近代味の勝つた歌には遭遇する。流石に武家時代で、戀の譬喩に迄、

身は錆太刀、さりとも一度はとげぞしようずらう。
奥山の朴木よ喃、一度は鞘になし申しよ、なし申しよ。
和御寮に心つくし、弓ひくぞ、强の心や。

と弓や太刀を借り來つたものがあり、茶の流行を物語るものには、

お茶の水が遲くなり候。先づ放さい喃。又來うかと問はれたよ喃。なんぼじれつたい新發意心や。
新茶のわりたち、摘みつ摘まれつ、ひいつ振られつ、それこそ若い時の花香よ喃。
新茶の茶壺よ喃、入れての後はこちや知らぬ、こちや知らぬ。

隨分露骨な想だが、かう謠へば左迄嫌忌の情を呼び起さない。全く譬喩といふものの有難さであらう。他に尺八の流行や狩裝束の意氣姿や、宇治の川淵の水車や、桂の里の鵜飼を謠つたもの、放下僧の歌、海道下りの歌乃至は後に箏の組歌に採入れられた歌といつたやうな注目すべき歌もある。それ以上に說洩らし得ないのは

人買船は沖を漕ぐ、とても賣らるゝ身ぢや程に、しづかに漕げよ船頭殿。

である。梅若丸、都志王丸や安壽姫等の親子、信田小太郎の類、謠曲や幸若舞曲に誘拐譚が仕組まれてゐるが、それが民謠の上にも現れたのである。とても賣らるゝ身ぢや程にといふ一語は何といふ酸絕さであらう。戰國時代の生活の不安定は此の一つの歌にもよく示されてゐるのである。服飾類に關しては

あら美しの塗壺笠や、これこそ河內陣土產、エイコロエイトナ、エイコロエトナ。傷口がわれた、心得て踏まい中こゝら(本ノマヽ)エイトロエイト、エイトロエトナ。

がある。木遣か石曳の歌だが、戰亂の世の匂は飽く迄高い歌といふべきであらう。雜謠の歌に「君が愛せし綾藺笠、賀茂の川原に落ちにけり」と藺笠の流行を知らせてゐて、それは鎌倉時代にも室町時代にも行はれてゐたが、新樣のものとして藺笠の外に塗笠も菅笠も

出てゐた。

笠を召せ、笠も笠、濱田の宿にはやる、菅の白い尖り笠を召せ喃、召さねばお色の黑けに。

名殘惜しさに出でて見れば、山中に、笠の尖りばかりが、ほのかに見え候。

尖り笠は其の名の如く頂の尖つた小形の笠で、狂言の小歌の「柳の下」の中にも、此の笠の行はれたことが見えてゐる。永く行はれて、西鶴以前の假名草子類の挿繪にまゝ之が描かれてゐる。帽子が工夫されなかつただけに、笠は樣々案出されて後の元祿時代に入つては塗笠には蒔繪を施し、紅絹の紐に人目をひくことを努めれば、一方には菅の丸笠に絖の白紐をつけて淸艶を誇ることも行はれた。年配によつて、職業によつて、身分によつて、夫夫別種なものが用ひられたが、其の萠芽は右の二三首に認め得られるといふべきである。

總じて民謠の特色は野趣の橫溢といふ點にあらねばならぬ。梁塵祕抄は最高貴の御方の輯、閑吟集も時流よりは高い桑門の手に聚められたので、兎角に田園生活に觸れた歌が尠いといふ憾が伴ふ。但し後者には尠い代りに我等が恐縮するやうな歌も編み入れてある。

誰そよお輕忽、主あるおれをしむるは、喰ひつくは。よしや、しやらるゝとも、十七

八の馴染よ、〳〵。そと喰ひついて給うれ喃、齒形のあれば現はるゝ。

これはまだ忍び得られようが、次の一首に至つては敗亡するより他に方がない。もう此處迄來たから諺通りに閑吟集の紹介は打切りとする。

昨夜の夜這男、誰そ。汚れ御器籠に蹴躓いて、大黒踏の候。〳〵。

江戸時代の民謠と習俗　封建制度が完成して兎も角も二百幾十年の間大した騷ぎの起らなかつた江戸幕府時代は、總じて庶民も安定狀態にあつたものといふべきである。當代は分けて三期となすべく、髮薄く髯厚く、面體にくさげにてといふ男が幅を利かした寛永を中心にした其の前後三四十年を第一期とする。武力よりも金力が物をいひ、成金連が輩出して、正貨が海外へ流出して、上下一般が泰平の美酒に醉つて、遊里劇場が榮えてと、かういへば世界大戰後の數年間、大正は八九年頃を指すやうだが、世にいふ元祿時代の天和貞享頃は全くそれであつた。之を第二期とする。第三期は文權が京阪から江戸に移つて、文化爛熟を極めた安永寛政時代、次いでは天保時代を立てて之を第四期と見るのも文學の上からいへば決して不當ではない。けれども民謠には此の各期にそれ〴〵の特色がはつき

りと出てゐるのではない。前に社會組織と經濟上とから見て說いたが如く、餘程の事でなければ暴動や一揆は起さず、武士には頭の上らぬものと考へて、忠實に働いて、上納を怠らないやうにしてゐたのである。けれどもそれは農民のことで、元祿以降になつては、武士よりも町人が生活に餘裕を得たのであつた。さうして金錢を湯水の如くに消費して、逸樂に日を送るものは町人中の分限者に限ることになつた。流行なるものは町人の間から起つた。江戸時代の民謠なるものは町人の間に產れ出たものが多く記錄されて、農耕に營々としてゐたものの叫びはやはり前代の如く記錄されてゐない。江戸時代の後半は武士時代といふよりも町人時代といふ方が當つてゐる。

寛永期　慶長以降の文運隆昌は各種の方面に著作が現はれて、それが刊行されたので、俗習流行の如きは世にいふ平民文學の俳諧戲曲小說狂歌川柳等の上に鮮に描き出されてゐる。その描き漏らしたものを民謠が特に反映してゐるとして擧ぐべき程のことは別に無い。かう言ひ切つてもよいかに思はれる。しかし散文體の平民文學としては假名草子類だけであつた第一期當時には、やはり民謠の上に注目する必要があらう。例へば三味線の組歌に作りこめられた

京では一條柳屋が娘、四つ割帶をたすきにかけて、如何にも腰がしなやかな、〳〵。
これは京鹿子、色もよや、目結手際もよや、着よや、あら都しや喃、都のしてたち
戀しや。
紅の三尺手拭、かたみに見よとて、置いて行く。
これの千代女が髪髷は、紫竹こだけに四つの節、加賀や越前美濃尾張越後京根來粉河
坂本で所望めされた。

の如きは、好箇の風俗史料と稱すべきであらう。

元祿期　第二期の元祿期に入つては西鶴や其磧の浮世草子や近松以下の淨瑠璃、歌舞伎芝居の繪入狂言本、芭蕉以下の人の俳諧等に俗習流行等は子細に描寫されてゐるが、しかしなほ、松の葉や落葉集や松の落葉等に輯錄せられた民謠を無視することは許されさうもない。

加賀節　わきて節　伊香保節　長崎節
のんやほ節　薩摩節　ちん〳節　さいこの節
さんさ節　投節　四季よほん節　下關節

ほとんど節　有馬節　しよがへ節　やよや節
三谷源五兵衛節　のつちりふぐじる節　御門徒與五平節
吉原しよつくりしよ節

擧げ來れば歌舞伎歌や踊歌、鳥追、萬歳、祭文、讀賣などの以外に、盲人によつて專ら唄はれた長歌端歌類の所謂上方歌（地歌）以外に、右のやうな流行歌の幾十種幾百首が記されてゐる。さうして此等の中には、其の一首が浮世草子の一章一篇にも當りさうな値打のあるものも存するのである。

よしやわざくれ、身は朝顏の日かげ待つ間の花の色、恨みられしも恨みし人も共に消え行く野邊の露（加賀節）
籬ながらの御見はつらや。人目忍べば思はくばかり、袖は涙の淵瀨となりて、憂きは流れの身は捨小舟、せめて暫しはとまれかし（捨小舟）
親は他國に子は島原に、櫻花かやちり〳に（薩摩節）
憂しや此の身は親はらからの、爲に沈みし戀の淵（投節）

暦里全盛時代であれば、一面には浮いた歌、其の反面には沈んだ歌が謠はるべきである。

漂客も遊びがすさんでは、つい理に落ちてしまひ、はては言ひ知れぬ哀愁に襲はれて、酒も苦く、いやに倦怠を感じて來る。まして憂き河竹の勤めする身に取つては、客があればあり、無ければ無いで、絶えず悲痛に惱んだことであらう。近松ではないが、片目では笑ひ片目では泣くのが彼等の身の上であつた。右の四首は遊女自身の情を述べたものであるが、此の類はまだ〳〵いくらもある。客の側にも、

見附宮崎舟の中、宿の首尾のみ案ずれば、我が黒髪も白髪となる。几帳にはだまさるる、二枚五兩の小脇差、緞子三本紅絹五匹、綿の代迄相添へて、霜月半ばに贈れども、つひにそれとて見せもせず、今は二人が中にある。

といふ悔恨が謠ひ出されてゐた。逆上と覺醒と、哀愁と悔恨とは遊里につきものであるが、江戸時代程高唱されたことはなく、江戸時代でも元祿時代程絶叫されてゐたことはない。けれども當代人は押並べて醉生夢死といふ語に合致して、

晩にござらば肥後鉈さいてござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、ノンヤホ〳〵。肥後鉈さいてござれ、晩にや梅の木の枝おろそノンヤホ(のんやほ節)

此處にやはやらぬ鹿兒島にはやる、三十振袖四十島田ほいさ〳〵(鹿兒島)

咲いた櫻になぜ駒つなぐノホンエ、駒が勇めばノホホン〳〵、ホンホノン、イヨ〳〵花が散る〳〵(咲いた櫻)

佐渡とな、佐渡と越後はサイコノサいよ筋向ひ、ソレハエ橋をな、橋をかけよやれサイコノサ〳〵いよ船橋をソレハエ(さいこの節)

おかた塗笠七年早い、菅笠にかへてお召しやれさ。近江の笠はイヨコノサイタサ、形はようて、白癩(びゃくらい)着ようてさ(塗笠)

といつたやうな歌を謠ひ、浮かれ文句に事を缺いたか、

今度長崎で變つた小歌をならうた。あとさきは覺えないが、中の唱歌を忘れた。さこそあるべいとて書いて貰つたが、それさへ出口で落した。これ面目ない、首尾も所譯も此の通り、これ面目ない(失念)

とさへ謠つた。八代將軍吉宗によつて矯正策が施された譯である。それでなかつたら、どん底迄落ちて行つたことであらう。

以上は專ら京阪の地から出た歌謠の書から拾つたので、自然上方の歌が多く、且つ俗間

流行の下がかりの歌は棄てられたらしい。江戸にはもつと露骨な歌も行はれた。

咲いた櫻に嵐が毒よ、若い女子に子が毒よ。

は元祿の末年から寶永三年迄謠はれたといふ、派手好、若作りの行はれた當代にあつては全くかう考へたのであらう。

今年始めて都へ出たら、よその嬶見てうちの嬶見れば、扨もきたなやよごれた顏で、あのや猿めが雨に打たれて、しよほくないなりで。そこで嬶めが悧巧な者で、納戸へ這入つて、べにかねつけて、下に白無垢間着に黃無垢、ずつと上には茶縮緬の小袖、繻子の帶をばしよならと結んで、花の帽子に花の塗笠しよならとかぶて、さあとと去つてくりや、五里も十里も去つてくりや。そこでとゝめが呆れた顏で、昨夜のことは嘘ごと、今朝のことはしやれごとにしてたもれ。

こんな喜劇式の歌も行はれた。諷刺ばかりでなく、實際演ぜられた事であらうと思ふ。將軍のお膝許は殷賑と、榮花と、驕奢と、陽氣と、哄笑とが世を支配して、

神田の豪の與吉が女房、毛が無い無いとはやされて、愛宕の山へ登つて、獅子の毛をむしつて、膠でつけて、それ見ろ與吉、無い毛が生えた。

といふ歌さへ、正德年中には口々に傳唱された。

坊樣々々と名ばかり坊樣、鍋やくひたし女郎衆と寢たし、ソレ大家のかみさま品者ぢや。〳〵。

僧侶迄これである。將軍吉宗が財政の整理、人材登用、武技奬勵、浮華一切を卻けた筈である。此の時に紀綱を張らなければ逸樂遊惰はどこ迄行つたかわからなかつたであらう。

江戸文化の潰爛期　吉宗の下に行はれた緊縮は其の退職と共に弛んで、忽ち又寶曆以降の遊蕩世界を現じ、

傾城湯女白人踊子、呼出、山猫、比丘尼、綿摘、飯盛、夜鷹、蹴ころばし、舟饅頭。

といふ遊女づくしが臆面もなく謠はれ、「千里走るよな虎の子がほしや、便りきゝたや聞かせたや」といひ「酒涌く井戸と金のなる木がわしやほしいコイツガイイ」と呑氣なことが謠はれた。此等はみんな寶曆年中の流行歌で、同じく此の時代に、

女郎の誠と卵の四角あれば晦日に月が出る。

と謠ひ、「蝶々の笄とんで出る」とも謠つたが、やはり止めずに通ふ者が多くて、遊里の景氣

はいつもよかつたのである。さうして

本田くづしに三つ紋羽織シテヤレシテどうしたの、はかたおたあちいいに(本ノマヽ)
アンケラコンケラ鼠の半ぐつ、玉子の裏つけ、銀ぎせる。ヤンサモンサ、ソツチデセ
イぺんぺこぺん〳〵、大通さんかいのア、、イノウ (安永七年回向院善光寺開帳の時
の飴賣の歌)

といつたやうな歌も行はれた。大通は安永の中頃から天明の中頃迄の流行詞で、大度にし
こ細かい事は見て通すの意だといふ、智あり徳ある者なら寛仁大度だが、愚昧の者が行ふ
と家を破ると此の歌を書留めた人が書き添へてゐるが、其の家を破る者のみが多かつたの
である。歌舞伎芝居、座敷踊、長唄、あらゆる遊藝は都鄙に行きわたつて、それと共に倫安
頽廢の氣分も擴がつた。似非通どもが無理算段をして通ふ遊里の内幕を寫した洒落本、幽
の浮くやうな洒落を綴つた黄表紙、強ひて此の世を茶にする狂歌、人の穴を搜すを能事と
する川柳、無學な芝居作者の手に成つた美しい寢言たるに過ぎない長唄や淨瑠璃が、其の
時代向の曲節の爲に喜ばれて弘く行はれた。執政者は驚いて、時々釐正に力を致した。白
川樂翁は中央で、上杉鷹山公は地方で厚生濟氏に竭された先覺者、小樂翁小鷹山は所在に

あつたが、國難もなければ、經濟上に大變動が起るでもなし、階級は動かす事の出來ない
ものになつてゐた其の時代にあつては、町人百姓は前代の跡を追つて、日を過すだけのこ
とであつた。いや武家も公家もそれであつたのである。すれば民謡のみが變ずべき筈はな
い。流行の移るが如くに、曲節はいろ〳〵に工夫され案出されたが、歌の内容には大した
變化は起らなかつた。當然爲政者に對する諷刺の歌は出づべきであつたが、高唱すれば直
に處罰を受ける時代で、さうかといつて庶民が合同してこれに抗爭するには武力は伴はな
い時であつた。自然そんな歌は出ても錄せられなかつた。

文化から天保頃にかけてはよく俗間の謡ひ物が書留められもし、刊行もされたが、其の
書に題して、御笑草といひ、浮かれ草といひ、粹辨當といふので、歌の内容は想察せられ
よう。何れも粹だ、野暮だ、通だ、意氣だを謡ひ、じれつたい、遣瀬がない、氣がもめる、
だまされた、くやしいを謡つたものである。それでなければ、飽かぬ眺ぢやないかいなと
無理にも陽氣なことを謡つてゐる。「甘口らしいが此の頃は、何かにつけて思ひ出す、神
神拜むも浮の空、うつかりひやんと口の内、念佛忘れてお前の名」と、とつちりとんの歌
にあるが、かうした浮かれ氣分の歌が人に喜ばれ、地口や洒落の上に立つ歌は、いつも〳〵

歡迎されてゐた。享保以後の流行歌は何百種類にも上るべく、歌は何萬首にも達しようが、題材主想に大差がなく、異性間の愛情、それも遊女相手の想に成るものが多く、それでなければ輕い滑稽をねらふものばかりであつた。口說と稱し音頭と呼ぶものもそれと大差のないものであつた。

黑船渡來　封建制度が確立したのは三代將軍家光の時であつた。それから二百年後は天保時代で、江戸文化は爛熟の域を通り越して、頽廢に行詰つた。豪奢將軍家齊が歿するを待つて、老中水野越前守忠邦が勤儉令を出し、ついで學問を奬勵し、武備を嚴にすることを令したが、其の實蹟のあがらないうちに早くも黑船が押寄せて來たのである。外國が通商貿易の名の下に押寄せなくても、もう何とかしなければ、國民一般を永く安定の狀態の下に居らしめることは出來なかつたのである。鎖國論と開港論との爭は所在に起つたが、泰平に慣れた江戸の民はのんきなものであつた。

雨の夜に日本近くねほけて流込む唐模樣、黑船に乘組み八百人、大筒小筒を打並べ、
羅紗猩々緋の筒つほ襦袢、くろんぼは水仕事する、大將軍は部屋に構へて眞面目顏、

中にも髯の長いジヤガタラ唐人が海を眺め、キクライ〳〵キンニヨウ〳〵と、貰ひし
大根土產に、亞米利加さして歸り行く。

これが實に亞米利加の使節ペリーが軍艦四隻を帥ゐて、浦賀へ入り込んだ時に流行した大津繪節の歌で、當時ひろく行はれたものである。何の目的の下にペリーが來たか其の深意を知る者は極少數の具眼者だけで、一般は薄ぺらに考へてゐたのである。さうして近松門左衞門が國性爺合戰の獅子が城の中に敍した事を借りて謠つてゐた。キクライ〳〵の如きも此の中に韃靼人の語として出たら目に使つたのを其の儘に用ひたものである。勿論英語は幕府の外交當事者も解せず、蘭方醫も解せず、通事にもあぶなくて無闇に騷ぎ立てたのである。さうして幼稚な武器を携へて沿岸防備に繰出したのであつた。然るに、

日本を茶にして來たか蒸氣船(正喜撰)
　　たつた四はいで夜も寢られず。

といふの類の狂歌が多く出た。やはり大津繪節の歌に

アメリカのごしゆ國は、交易願ひにきんたのバルリが使に來たら、浦賀もいそいで、
追々御注進、江戸も諸國も大騷。鐵砲鍛冶屋は穴をほる。馬具屋は皮はる、鎧の絨す

る。俄に砲術軍學それから稽古する。そこで神佛祈り立て、程よく神風吹くであらう。

日のもとあきれる、アメリカかは忽ちとろけて流れます。

といふのがある。騒ぐことは騒いだが、恐ろしさに、何か事あれかしの情を滿足させる面白さが手傳つてゐたらしく、こんな類のひどく相手を馬鹿にした歌が論はれた。思へば肌に粟の生ずる話であつた。井伊大老が思ひ切つて條約を結んでからの國論沸騰、志士の奔走は今更に說く迄もない。形勢は次第に轉じて幕府は朝命公家を恐れるやうになつて、會津藩主松平容保を京都守護職にした。暗に幕府の權を支持しようといふのである。當時江戸では

會津肥後樣京都守護職勤めます。內裏繁昌で公家安堵、トコ世の中ようがんしよ。

と謠つたが、繁昌も安堵も得られず、世の中は一向よくならなかつたのである。それでも幸にして諸外國は某一箇國のみが我が國に對して勝手なことをすることを許さなかつたことを喜ばなければならない。朝廷が漸く力を得、島津が勢を張つたことは

菊は榮える葵は枯れる、松に轡の花が咲く。

といふ歌にも知られた。かの長州征伐にも江戸ではのんきに

大正十三年十二月一日印刷
大正十三年十二月十五日發行

日本民謠の研究

著作者　高野辰之
發行者　東京市日本橋區數寄屋町一番地　神田豐穗
印刷者　東京市小石川區初音町八番地　小島鶴吉
印刷所　東京市小石川區初音町八番地　小島印刷所

定價金壹圓

發行所　東京市日本橋區數寄屋町一番地　株式會社　春秋社
振替東京二四八六一番

春秋社發行

早稲田文學パンフレット

多年文藝の向上、文化の補導に努め來れる早稲田文學の別事業で、關係同人が專門の研究のエッセンスを平易に且つ興味深く百頁内外の小冊子に纏めてある。民間に知識の普及を計るは小冊子に依るのが最も効果多きは異論なき所、偏へに江湖の歡迎を祈る。

坪内逍遙著	東西の煽情的悲劇	定價六拾錢 送料六錢
五十嵐力著	平家物語の新研究	定價六拾錢 送料六錢
吉江喬松著	自然美論	定價七拾錢 送料八錢
本間久雄著	唯美主義者 オスカーワイルド	定價七拾錢 送料八錢
原田實著	近代婦人運動の樣相	定價五拾錢 送料六錢
中村吉藏著	希臘劇・沙翁劇・近代劇	定價六拾錢 送料六錢
山口剛著	江戸文學と都市生活	定價六拾錢 送料六錢
西村眞次著	日本神話と宗教思想	定價四拾錢 送料四錢
木村毅著	近代文學に現はれたる 神愛・自然愛・人間愛	定價六拾錢 送料六錢
日夏耿之介著	神祕思想と近代詩	定價四拾錢 送料四錢
荻原井泉水著	芭蕉の自然觀	定價五拾錢 送料六錢
小川未明著	藝術の暗示と恐怖	定價六拾錢 送料六錢
生方敏郎著	福太郎と幸兵衛の對話	定價六拾錢 送料六錢

旅人芭蕉

萩原井泉水著　定價壹圓六拾錢　送料拾四錢

人生の旅路を最も寂しく生きたる哲人芭蕉の面目は新人の新しき主觀を通して最も適切に描出さる。芭蕉に關する著書多しと雖へども本書の如く現代人の胸にかくまで痛切に俳聖の生活を響かすものあるなし。あゝ旅人芭蕉――旅に生きて旅に死す。その悲痛寂靜の境地を本書に見よ。

西行

上野松峰著　定價壹圓五拾錢　送料拾貳錢

漂泊の人

これ戀の人、煩惱の人、詩歌の人にして、かれて寂靜の哲人たる西行法師が壯年胸裡に惱みの崩し初めし頃より、遂に晩年一杖一鉢、身を行雲流水に托するに到りし心的經過を詳描細敍す。これ體を小說に假れる歷史と云ふも亦可なり。

全法然

須賀隆賢著　定價壹圓六拾錢　送料拾貳錢

これ法然上人に向つて新人の加へたる新見解。彼が智慧第一の法然房と讃へられ、法然具足の聖と崇められながら、その智慧を捨てゝその聖を去つて佛教をスコラチシズムより救ひ、人間宗教を創設したる經緯は、傳記の小說的記敍と、平明なる教理解說と、嚴正精到なる批判と、敬虔なる讃仰と、詩趣溢るゝ感想との渾然融合せる此の一卷の悉すところ、卽ち『全法然』の題名なる所以である。

聖フランシス

宮崎安右衛門著　定價壹圓九拾錢　送料拾四錢

聖フランシスは中世宗教の花にして、又永遠に人類の信仰心を照らす法燈也。聖貧の境涯を要と呼びて乞食の生活を嶮しみ、深奧の感化一世を掩ふ。本書は一面に於て正確な傳記たると共に、他面に於て興味豐かなる創作の如き、藝術的色彩に溢る。

529
174

終